

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
昭和四十四年十月二十五日印刷
昭和四十四年十一月一日発行（毎月一日発行）
（第五十号）



No. 50

特集・第5回 はたらくうた

十一月号



酒 清
日本盛

灘 西宮酒造 釀

ニホンサカリ

超特撰 (化粧ケース入)
一、ハリットル詰・一、四一〇円



えらばれ
みがきぬかれた 灘の酒
超特撰 日本盛



料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 **蓬萊** 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

今月のことば

小児科医の診察場は時々変った風景を見せる。先日顔なじみのK坊をつれて母親が見えた。幼稚園から連絡があつて、この二、三日どうも変ですよ。お遊戯会も明後日というのではかのお友達は一生涯命やっているのに一人つ立つてぼんやり空を眺めてばかり。どこが悪いのではないかと思ひましてと受持ちの先生の話。それで連れ帰る途中でお伺いしたとの事。診察しても病氣らしいところもなく明るい顔でキョトンとして居る。K坊どうしたんだい、頭でも痛むのかいと尋ねると、

K坊まっすぐ顔を立てたまま、だつてさァ、夕焼け小焼けで日が暮れて……をこの前の月曜から毎日おけいこさせるのだもん。飽きちゃったんだァ。もう一寸で噴きだしそうな笑をぐつと呑み込んだ小児科医は、静かに聴診器を耳からはずしながら、K坊の頭に鉄カブトを乗せ、ゲバ棒を持たせた姿を考えて見た断絶とは所詮きびしく寂しいものであり、そして小児科医の使命もしみじみ尊いものであることに気付いた。

内輪からもれた噂でねじ込まれ

とつときの笑顔でアンコール幕があき

立志伝前半生を子にかくし

習慣にしても寝酒のしつこすぎ

どうせばれる迄がいのちの低姿勢

中島生々庵

川柳塔十一月号

川柳塔十一月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵……(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選……(4)

秋……………橘高薫風……(2)

川傍柳初篇研究……………(七十七)……………(20)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

川柳徳川記……………(九)……………富士野鞍馬……(30)

摩天郎著「堺の川柳散歩」……………川村好郎……(31)

秀句鑑賞……………清水白柳……(42)

火の粉を……………高鷺亜鈍……(27)

剽窃縦横だん……………(大陸巷談)……………東野大八……(28)

私論・柳論

秋

二階を降りてどこへ行く身ぞ

十一月になると句集「旅人」のこの冒頭の句が殊更寂寥として心に迫る。秋の夜長に「旅人」を繙く時、路郎先生の句は、喜怒哀楽を深く感じ取る卓抜した詩心と、人生を真執に生き続けて得た広範な社会的経験が土壌になっていることがひしひしと感じられる。私が初心時代に、最初に不朽洞をお訪ねして最初に発した質問は「川柳の定義を一口で教えて下さい」という、とてつもないものであったが、先生は、「一口では曰く言い難いだが、強いて云えば、十七音字を基底にした批判詩だ」と答えられた。先生は作句にも選句にも確固とした信念を以って臨まれたから、丹路、豆秋、喜由、水客潮花、梅里、一瓢、満潮等作家の個性が燎爛と花咲いたのである。

はたらくうた……………(22)

福井野迷路・石倉旅風・小畠桃路・川端柳子・川口弘生・羽原静歩・
垂井葵水・新岡回天子・高杉鬼遊

きのうきょう……………本多柳志……………(41)

梨……………阿万万……………(44)

近作柳樽……………菊沢小松園選……………(32)

雅号ぶっちゃけばなし……………野田素身郎……………(56)

初步教室……………本田恵二朗……………(48)

一歳の恋人……………不二田一三夫……………(43)

大萬川柳「姿」……………清水白柳選……………(50)

川柳塔社同人総会…………………………(45)

★柳界展望……………(薫風)……………(52)

★本社十月句会……………(庸佑)……………(54)

★各地柳壇……………(文秋)……………(58)

「ダンス」……………石居高志選……………(46)

一路集「養子」……………磯野与志選……………(46)

「夕刊」……………早川清生選……………(47)

★編集後記……………(二三夫)……………(65)

川柳塔も五十号を迎えたが「路郎の影」のあまりにも、薄れてしまったことを淋しく思うのは私だけではあるまい。甲吉、花村等好作家の活躍には目覚ましいものがあるが、最近また僚友清生が退くと云う、秋の空しさが一入身に沁みる。

十月号の近作柳樽では、第一頁に女性が二人、男性は一人。第二頁には女性五人、男性四人という女性上位ぶりである。これら新進女性作家を如何に育てるかは川柳塔の明るい未来の一つでもある。選者諸氏は(ほんとうは選者は一人でよい)新進を甘やかさず厳しく育てて欲しい。先生譲りの、作家が胸板にぶつかって行ける厳しさがなくて川柳塔を向上させることは出来ぬ。盲目亜鈍の闇にまみれ、のたうって絶叫する作品の気魄が、沈滞した川柳塔へのゲバ棒のように私には感じられる。路郎先生の作品と選句をじっくり皆で勉強しなければならぬ秋である

聖書一冊 菊一輪の二階也
(橘高薫風)



中島生々庵選

名古屋市 吉田水車

マツチをすればポット燃えそな大暑かな

柳翁忌

川柳のひまには名主八右衛門
人と人信じればこそ月へ行き

一ぺんは貫に直さにや気がすまず
熱帯魚造化の神のいたずらか

鳥取市 藤本礎山

夫婦だけの部屋で夫婦の話する
もうはだか見飽きた顔の聴診器

見舞われてほえむ外なし病臥する
病臥して酷使した身にわびる日よ

誕生日祝いをベッドで子からうけ

倉敷市 野田素身郎

妻子留守昔の写真出して見る

階段にきてからミニを追いつ越さず
いつもより酒量がふえる一人旅

一人来てみればなんでもない景色
ほんとうは偶然でない待っていた

香川県 三井酔夢

長男入院中

声だけでナースを当てて嬉しがり

長期戦心眼開く心意気

学校へ帰った夢を聞き流し

千羽鶴揺れて心に熱きもの

色づきたいちょうのこと云ってやり

5・4・3・2・1の次き無一文
青森市 工藤甲吉

秋風一番まっすぐに酒蔵へ

ふるさとしてハダシになって嬉しがり

民主主義から軟骨の人がふえ

デノミまでじっと耐えてる一円貨

伊勢泰運寺

大阪市 正本水客

青葉のなかからいきなり鐘の音が生まれ

住職みずからのもてなしに風青し

山みずを駆使して水音夜を徹す

三方は障子しぐれのように虫当る

山おりきるまでを鐘撞いて送られる

大阪市 金井文秋

だしぬけの客頼ばったとこへ来る

胸忘れあとの祭の膝を打ち

早過ぎた人氣に地位を踏みはずし

達者だけとりえとおやじ頼られる

食あたり倍食べた人当ってず

倉敷市 木村千容

大原大仁の初盆を迎えて

美しいまちにそだてた仏さま

追贈をされた名誉の市民章

八十三女房の夢僕の夢

八十三余は満足といったげに
八十三ことしの夏は暑いです

笠岡市 出原真奇

鍵穴をのぞいたとこを見付けられ

輸血して育てた娘嫁がす日

大物に盃もらってむせかえる

箸の数段々減って子も巣立ち

朝顔は短気な花だとふと思う

兵庫県 河原みのる

女婿急逝（一句）

せめて癌なら諦めつくものを

施餓鬼法要にて（二句）

寺をつぐ氣か中学生らしき僧

人をうたがえと訓えることの悲しさ

日ソ会談（二句）

ありようは北海道が欲しかった

臥薪嘗胆こんどはお株をとられたり

兵庫県 遠山可住

共に色あせて来ました夫婦箸

忌憚なき御意見の出る酒となる

内職の横に寝る子の爪が伸び

二十五年ぶりの戦友会

貴様の顔探りながらの酒となる
再会の握手へ妻も来て座り

大阪市 福井野迷路

サード踏まぬホームインに似た失策

百歳を聞けば平々凡々だ

待たされて待たされたことを顧みる

つんばやぜいかれてるぜ聞えてず

人生にこんな近道あったのか

大阪市 本多柳志

善光寺

尼宮のおんかみそりへガムを噛み

一茶旧居

そばの花信濃は秋の早いとこ

野尻湖

から松の高さへカメラ定まらず

妙高を捉えて湖のたじろがず

千曲川

夏草や藤村の詩碑どのあたり

豊中市 戸田古方

お隣りの風鈴をさく昼の風呂

手控えて帰ればもっと買うといで

孫の手をひいて孫の時代を考える

サポーター手にも足にもはめて見る
赤ん坊がなきやんだら犬がなき出した

新居浜市 安藤桂仙

倒産

腐った縄で糸爪の柵が落ち

毎日をこのように過ごしています

年金へ逆うように物価高

座布団で臍をかくしてから昼寝

銭湯へ一番乗りをした自慢

老いばれのセンチテレビの前で泣き

倉敷市 水粉千翁

杉苗の露にまぶしき未来あり

真相をえぐればメスが錆びてくる

一目の押しへ番茶の味を知り

真相を包むベールが透けている

気ままですとも言う嫁の行届き

京都市 松川杜的

香肌峽

あいさつのうれしさ峠の岐れ路

泰運寺

噴水に虹あり和尚の話好き

雑草でよし歴史の中に泰運寺

一泊の好意を鐘に送られて

せせらぎの冷氣へ溶ける鐘の音

岡山県 浜田久米雄

八十を越えたい欲のありはあり

一億へ秋食欲の灯がともり

乗り越しをして本性をうたがわれ

男女とはうれし半分ずつ生まれ

注意せよ注意せよと氣象庁

倉敷市 本田恵二朗

独り言を楽しもう馬鹿みたいかな

いさり船松の小枝にひっかかり

ヘルメット顔かくさねばゲバれない

船足を月キラキラと追いかける

そんなにあわてるなまだ二十年もつよ

諫早市 川岡靈眼子

二十四回原爆忌に寄す

被爆手帳なき仮旅の雲にらみ

被爆義手挙げて原爆いきどおり

平和の噴水塔完成

水々の叫び今なお水供養

噴水の水を爆碑に持ちかえり

吾六十二回誕生

この暑さ明治の骨を素ッ裸

高槻市 傍島静馬

温顔へ有象無象がたかりに来

手の甲へうつかりとまった蚊の不覚

老眼鏡街頭署名を迂回する

日日好日々々歳々呆けてくる

マイホームどころか首があやうなり

大阪市 後藤梅志

こおろぎに上手も下手もなかりけり

心臓に毛が生えていて死にはぐり

そばのしる生きてるうちは忘れまい

やつこらさ立ったところが便所なり

イチジクももう終ったか雀くる

大阪市 橘高薫風

広島(二句)

ここに来て胎児のごとき祈りあり

人肌のぬくみの牛乳に憩う晩秋

ひと一人心に見えて秋の風

默契や下弦の月が死をこぼす

河相すゝむさん一年祭

虫が鳴く一直線に亡き人へ

大阪市 不二田一三夫

チャルメラはやくざを捨てた男とか

鏡のウソつき 着ものが左まえ
秋の夜はドラマ 幻想の幕あがる

寄席(二句)

しゃべくりを忘れ漫才どこへ行く
一発を狙う高座がカラ回わり

鳥取県 清水 一保

清貧に夢有り娘等の便り見る

戸を締めて寝るには惜しい月夜

陳情団余分なホラも聞いておき

有り余る米とは云えど良い捻り

竹原市 小島 蘭幸

責任感がまたしても後手にする

別れ道がある僕の夢君の夢

デートに誘えばイヤよと初心な娘なりけり

歩こうよほら幸福が飛んで来た

広島県 高橋 鬼焼

絵日記の花にも今朝は水をやり

アルバイト今日が最後の汗をふく

敬老の日を寝たきりの母見舞う

叱っても人形笑顔をくずさない

平田市 久家代仕男

宿題へ知恵貸した首尾聞きたがり

風さらり秋の湖上を陽が洗う

沛然と慈雨 雨漏りに慌てたり

焚口と話がはずむ仕舞風呂呂

大阪市 酒田 清子

若いのへ一歩譲って事がすみ

うちの孫どこの児よりもよう見える

名犬の恋は鎖の長さだけ

よいばあちゃんへそくりたんと持ったはる

宇都市 平田 実男

久々の下駄がうれしい試歩の足

妻あつての賞状を妻賞めてくれ

サインの字だけは上手に書くスター

豚の食欲屠殺場を考えず

門真市 福島 鉄児

足踏みのままでこじれている二人

アドバイスされて軌道に乗った恋

大掃除千人針が出た回顧

直すまで待とう借家の雨の洩り

下関市 国弘 半休門

ポスターで塞いで綺麗な壁にする

リコピーにする一枚へ手がかかり

賞状を片手で受けて丸めてる

頂くと言うて質権行使する

鳥取市 河村 日満

大山夏期講座にて（二句）

三食付きの三つのふとんに四人寝る

飛び込んで海へ若さをとり戻し

萩にて（二句）

琴ヶ浜蟹も交通事故に遭い

風穴の効き目くしやみをして笑い

岡山県 直原 七面山

旅のしるしの松葉蟹

なにする女ぞ肌に入墨

無い知恵しぼって恋の駆引

尾の道の千光寺にて

白蓮も旅装を解いた千光寺

大阪市 大坂 形水

脱線もできずに秋を淋しがり

出席も商売のうち会ばやり

気の利いたのもたまにある記念品

世界二位などと良い気になっている

伊丹市 小川 静観堂

俺が死んでも泣く奴居るまいいい気味だ

亡妻恋し（三句）

結婚なんかするんじゃないかだった亡妻恋し

亡妻の骨壺あの夜の星くずでいっぱい

雲に手を振って亡妻ようお寝すみ

大阪市 山川 阿茶

やらずの雨そんな一コマあってはし

なまじっか頭が切れてヘルメット

ふくみあるお世辞とわかる年となり

常識の識域ちがうもどかしさ

堺市 吉田 圭井堂

家計簿は子孫に残す物の価値

最後まで当てにしていたノーチップ

限界を悟って出した手切れ金

朗々と明治の声でビルの谷

松江市 小林 孤呂二

権力に負けた苦き酒なりき

とは言うものの年功序列に僕もいた

夕焼けに鎌研ぐ農家見られない

親の気も知らず飛行機で来る知らせ

岡山県 坂井 三葉

へちまぶらり世情にうとい貌でのび

米審の不安をよそに穂をたれる

独身へ組織が鎖つけたがり

デラックスな旅行土産を値切って

京都市 都倉求芽

ウインドウ今日も人形は廻らされ

夜を泳ぐ人魚も混る市場籠

マンションの二号のように熱帯魚

鉄骨にはさまれルネッサンスがちぢこまり

高槻市 福田丁路

秋深き或る日金魚の憂い顔

学校で教えぬ歌が上手な子

大物を皆んなで運ぶ蟻の智慧

人間の屑の焼場もあってよし

豊中市 和田一乃字

募金箱こちらもほしい位なり

この茶びん買った頃には新世帯

丸い月勿体ぶって雲を抜け

安静を守れぬ母に意見する

米子市 八木千代

サンプルをめぐりしばしの夢を撰る

まないたの傷主婦の座の暦とも

姓名学に凝り子宝に恵まれず

鈴虫を飼えばこおろぎまで集い

高槻市 山田季賛

計算機に負けずソロバンの腕を見せ

一番風呂風呂好きに任せとき

そちらさんの好みに合す領収書

みの虫よ財布にされるを知っていず

大阪市 木村水洞

サンマからめざしに変わる世の移り

人生の悲哀感じる虫しぐれ

離婚せぬ程度の喧嘩くり返し

学校が休める台風子に待たれ

岡山市 川端柳子

くやしがる方ヘジャンケン負けがこみ

油虫分別くさい夫婦連れ

すがらんとすれば秋風通り抜け

次男新学期上版

子の全部知ったかぶりの手を離す

大阪市 川口弘生

含むとこあってか女爪のぼし

軽蔑をしてる男とまだ切れず

建売りへ若き希望の顔が来る

死ぬ死ぬと姦婦姦夫を手離さず

奈良市 村上春巳

高砂火力建設所単身転勤

座布団で掃いて独りの寝間とする
ヨメハンに書く便箋はちよつとてれ

大仏の鼻に線香とどかない

せんべいへ鹿がためらう赤い爪

大阪市 石倉旅風

景色見ることは第二の独り旅

明日またおなじ陽が射す窓をしめ

亡妻夢

夢現七分三分のひとに会い

暁の夢の中なる立ち話

愛媛県 村上旭童

政府にはあいすみません稲の出来

一日を追われつつけて雀暮れ

草刈機萩も桔梗もなかりけり

信号の赤をつぎつぎ追うあせり

倉敷市 奥谷弘朗

大げさなことに馴れてて妻強気

くどい程妻が念押す旅の酒

こればかりの貸しをケチンボ恩にきせ

ささやかな散財カッドンとて妻と食う

倉敷市 小幡里風

憎まれ口素顔で云わねばならぬ破目

強情な奴だと笑って子を叱かり
樹に登る蟹を見つけた日の誤算
今日もまた敗けてはならぬヘルメット

島根県 藤井明朗

七十五日噂消えるといい気なり

虫が鳴く詩境の中に君憶う

豊作へ値上げするとは聞えませぬ

職また変りふる里を疎遠にし

出雲市 弘津柳慶

ころも着てスクータで行く盆供養

かゆいから泣いているのに乳をやり

悪友へ妻をけなして酒を注ぎ

予定変更させる友あり途中下車

大阪市 西出一栄

明け方に風邪ひかされた夏毛布

風さらり下戸にもうまい日本酒

鈴虫へ書棚の整理思い立ち

茜雲もみじ一層媚びに媚び

大阪市 河井庸佑

山陰の旅

洞くつへすいこまれるよう遊覧船

温泉でゆだった卵も同じ味

つき合ひにしては苦しいバス旅行

大阪市 児島与呂志

ためらう時間がふたりを近づける

大事に大事にしあうて愛に生き

その瞬間にあるふたりの理性

セックスが愛などとはちよこざいな

富田林市 岩田美代

ただ虚空見つめて通夜の悔み受け

自分しかたよれぬ私がたよりない

天高く明日があったと言う便り

同じ言いつもの顔で聞き流し

大阪市 宮尾あいき

おそ咲の朝顔秋風がなぶる

花終えた朝顔に人間は酷

一本一本私を見捨て歯がこぼれ

伸る筈ないに虫歯は根を残し

枚方市 宮川珠笑

割り込んだ人と吊皮となりあい

子の寝言絵本の鬼に追われてる

子を連れて歩くに惜しいネオン街

おはようの今日は二度目を笑いあい

京都府 大鶴喜由

名月を迎える露台小さすぎ

危険牌切れそうもない十二巡

同行二人西国はもう秋に入り

欲が突張ってしあわせの気になれず

米子市 林瑞枝

助太刀を姑がして呉れ仲直り

たそがれの親切誘拐魔と見られ

離農した庭木ホテルに返り咲き

こんな日もあるかとよその孫を抱く

竹原市 山内静水

気らくさは私が馬鹿になってから

門前の小僧に教わる事多し

三枝の礼尽し会ってほくれるなり

控目によりそう妻の土性骨

桜井市 岩本雀踊子

味わって食べるよゆうのない暮し

おしゃべりをしましょう宝石抱く女

モウ金の無くなる頃の妻になり

背伸びする暮しに妻の肩をかる

堺市 高橋千子

よいポーズ作法と違う美しさ

ひざばしをはめる言葉のむずかしさ

硝子戸にガラスと書いて入居まつ
親の金もらうにやっぱり知恵がいる

藤井寺市

西 いわを

枯木でも天を仰いで立ちつくす
迷うだけ迷い行く先をきり開き
洗った積りが手に何か残り
点滴の秒針余命いくばくぞ

出雲市

原 独 仙

その線で行こう商談飲み明かし
金婚式よくぞ耐えたを振りかえり
また倉で眠り続けん稲の出来
今宵また明治の料理老二人

堺市

新 谷 笑 痴

連休の小鳥たんまり餌をもらい
口かたい人と見込まれ来た無心
鍵ッ子に隣りのあかりまぶし過ぎ

御堂筋の秋

公害に耐えて色づく並木道

八尾市

高 杉 鬼 遊

その釘を真直ぐ打てと棺の中
働らいたお金三拝して受ける
五十歳六十歳と居て若し
真実を打明けるから恋が逃げ

鳥取県 森 田 布 堂

写生したリングをママがむいてくれ
はずれるところだと指を槌で打ち
寝ころんだ座席の足を窓に見せ
雑草の力舗装を突き抜ける

笠岡市

松 本 忠 三

名案が浮ばず煙草灰になり
二次会の穴を出張旅費で埋め
身体だけ預け大名旅行をし
土足厳禁スリッパが見当らず

富田林市

浅 川 八 郎

いざゆかん青山への舗装完成す
私はここに居るとも言わず独り棲む
此所の主如何者らしい床の軸
吾が遺骨粉にして景色へ蒔いて欲し

八尾市

古 川 鶴 声

吸物椀玉子一が巾をとり
虫干へ古着屋程に釣り下げる
預って貰う程売れぬ小商人

修学迫り惜しまれる

登山道疲れを見せた唄となり

大阪市

市 場 没 食 子

寄らば大樹策なく大樹の下で老い

結構にその日暮して子も育ち
科学また月の神秘のベール剥ぎ

和歌山市

野村太茂津

先輩が切らしたおなかを見せたがり
附添いの妻の目窪び病癒え
朝顔のどこまで伸びるものうさよ

尼崎市

高津徹也

女房作吾財布盛衰記

軒吊へようやく秋の空となる
弁解の言葉に友情白けだし

岡崎市

木山遠二

程程に疲れた時に晩が来る
長生きをする気時世に逆らわず
天とう様信じ不運がまだ続き

大阪市

西森花村

誤植訂正ますますわからぬ前衛句

敬老と言うてもあったね議員さん
ハイキングに来てまでママはばやくなり

神戸市

仲 どんたく

ジンギスカンの肉焼ける音眼下の灯
設計は婦唱夫随のマイホーム

ホステスに肩叩かせて孫自慢

高槻市

若柳潮花

やとなしてでもと女は養う気
塗ったまま子役が帰る落のはね
だんじりの明りをさけて踏む夜露

姫路市

隠岐不醉

歯切りしてもう聞きませぬ古い傷
無理をして大学出して独り住み
あやまればよいに理窟でこじらかせ

大阪市

天正千梢

オートメで完成されて愛はなし
チャンネルを切って家族の対話
徒然に犬の声入れ長電話

無聖改め

小畠桃路

下駄ばきの日の御堂筋若かった
男ぶり山の起伏も霧化粧
おちつけばまだ残ってたファイト

宝塚市

若林草右

心頭滅却枕になった広辞苑
寝押ししてホテル畳の室に寝る
フエリーポート蠅も一緒に渡って来

西宮市

堅いこと云うて主流を押し出され
メートルに弱い返事の口ごもり

大阪市

中川滋雀

死ぬときは笑うてゆけたらとも思ひ

奈良市

宮口笛生

オイルまで塗って泳ぎに來たビキニ
六年をママは仰いで叱りつけ

厄日無事姿を見せた赤トンボ

岡山市

池田古心

冷でいいビールだけではものたらず
秋の風妻一まわり肥えてくる

熊本県

有働芳仙

老人クラブ名簿に記載された俺
入院へ見舞がひつこく説く信心
山の駅煙を吐いた汽車が着き

今治市

越智一水

ほっという呉れよと肩は泣いている
キリギリス俺もやせてる高く飛べ
赤い腹見せてボートに秋の風

岡山市

出原敬一

父の夢見てから仏拝み出し
原色の街の灯嘘嘘で燃え
生きている証拠地球は斗争し

岡山市

田村藤波

四十づら金魚とあそぶ快復期
妻ハンドル夫車輪の定期便

親に似ず良い子と言われ酔が覚め

八尾市

香川酔々

祈るより他に手のないだんまつま
台風ニュースを余所に虫の声
独酌に誰か来そうな予感する

下関市

桜川不水

元氣よくはみ出しそんな文字をほめ
社会科の教師ガイドの補足をし
二軒までは元氣よかった梯子酒

岡山市

横山一声

横着な南瓜茶の木へぶらさがり
放免の螢小さな星になり
ふり向いて欠伸を返すぬすと猫

松江市

中川晃男

豊作貧乏などと勿体ないはなし
倒産のうわさへ新車乗りまわし
保険屋と話せば事故のことばかり

高石市

谷沢好祐

残暑に堪えし今日の花閉ず紅芙蓉
初秋の空へスカッとヒマラヤ杉
円満にお別れしたい手切金

東大阪市

竹中肖二

共食いの激しさを鈴虫が持つ

この石もあの岩も欲し瀕八丁

ゆっくりもしてられませんかと坐り込み

前借りを高利に廻す抜け目なさ

東大阪市

竹中綾女

浜木綿の前で撮らせる浴衣客

川に湯の湧く所あり足ぬくめ

澄んだ水きれいな石の瀕下る

松江市

柳楽鶴丸

女性上位当分続くとコンピューター

過疎の村年々つばめの数も減り

中ジョッキのみほし今日は暑かった

岡山県

大森娛句楽

凡人の余生神社を巡る旅

三粒程降らせて蒸して雲は逃げ

溜める人徒使する人が笑い合い

鳥取県

谷無閑

寝ていてもむっくり起きた飲む話

売れ残る花をペンキで再生し

必勝を誓かって惨敗して帰り

大阪市

室谷鉄舟

はけ口がなくて無性に腹が立ち

ツーンフルベース見送りの三振

家族で淡路島へ

犬かきを笑う子供に負けられず

守口市

羽原静歩

モラルなきキャンパス今日もゆれている

大安へ折り目正したごあいさつ

凡人へ春夏秋冬空の彩

大阪市

水谷竹莊

博多帯きっちり締めて男舞

食事中と書いて受付昼にする

筆不精なくせにクイズにだけは出し

久留米市

永松道雄

闘争日女小供はお留守番

飲む程に膝がくずれる仲となり

人道が途方に迷うミニとゲバ

倉敷市

藤井春日

朝顔の短い命を咲き誇り

メイキナップ一皮別な皮を持ち

肩書がなくて汚職の憂いなし

東大阪市

久米奈良子

湖の涸れたる如く恋終る

風船の辛抱肺活量が負け

伯母遂に永眠す

土となる女の業の燃えつくす

愛媛県

渡辺曉童

角帯の手ざわり秋のしめかげん

和服着た旅など思う彼岸すぎ

くり返す歴史の愚をばまたたどり

和歌山市 垂井葵水

領域を頑なに守り文化賞

看護婦に脈とられるにもある姿勢

寡婦として廻り燈籠の中に坐す

岡山県 荻野鮫虎狼

秋の酒下戸も一杯欲しくなり

社長在室事務室は静か

おもちゃ買う予算そのまま残しとき

笠岡市 木山要次

人毎を疑うことのむずかしさ

灯籠の良いのはずむ親不孝

晩酌を横目で拝むありがたさ

熊本市 楠田ひで子

吉川氏の川柳を読んで(二句)

その半生知って生き生きと句が浮かび

顔知らぬ柳友の死もたえがたき

与党へ賛成するのにいる勇氣

芦屋市 丸川初甫

スランプを乗り越えよがしに蟬が鳴き

能書は読まず新薬惚れて飲み

コマ・喜劇(一句)

ライト一つロシヤの夜明け前の色

香川県 岡田拳法

どうしようもないと底辺荷を担ぎ

俺もまた弱いので皺寄せていた

ゲバ学生

物理的抵抗国会から学び

大阪市 西川誓二

曼珠沙華ルージュに似たる色にもえ

美貌と勝負生んだ親が首かしげ

また母を落胆させる娘の返事

大阪市 島野大吉

噴煙を牛は尻目に昼寝する

伝言板無言で読んでずっと去り

能書の温泉を飲む二日酔

大阪市 宮地双楽

太宰府に詣でて

菅公も太子の使徒に膝まづき

財宝はやめて心の遺産にし

山を抜く力もうせて床に伏し

鹿児島市 土岐トク子

無関心が巢喰う都会の吹きだまり

ありがとう抱いてイエスにかえる日々

医師の目けわしカルテと我を見くらべる

大阪市 今 西 章 雅

テレビ見合その後のお二人どうなのか

医者知らぬ食慾へ子等目をみはり

活花のあえぎへ冷蔵庫の氷

堺市 藤井 一二三

台風一過空の青さに眼をみはり

土地売却の金仏壇に詫びて分け

税務署が表彰する程貯めて死に

西宮市 野 呂 鷄 汀

熟したるザクロに愛は似てるとか

停年後安楽椅子は父の物

出世する気はありません家庭主義

羽曳野市 榎 本 吐 来

成上り金の尺度を当てたがり

追いかけど追いかけど夢遠くなり

午後六時飼い馴らされた顔並ぶ

岸和田市 葛 城 伊 三 郎

朝顔の末路垣根から引きちぎり

何騒ぐ恥部をおでこに張って迄

松江市 岡 崎 祥 月

真夜中の巡視月は無表情
ヘッドライトに馬鹿野郎とどなりたい

奈良県 西 辻 竹 青

千円のお金で去就に迷うこのころ

一本のタバコも分けたと歌にきく

大阪府 清 水 義 介

月からの声にテレビへかじりつき

かんぬきに虫穴のある旧家の門

兵庫県 大 江 秋 月

参観日四十女の美しさ

くたびれた新聞を読む競馬欄

加賀市 細 呂 木 魯 木

ボックスの長話雨宿りもかねている

命日へ亡父と同じ年になり

和歌山市 西 尾 公 作

縄くくり祖父の檜の数を読み

コンピューター果報は寝て待てとは言わず

西宮市 島 居 百 酒

皮肉ともとれる羨望聞いて旅

北海道旅行

看板のアイヌは辺地に狭まぐ活き

大阪府 横 倉 富 久 一

三度四度信仰変えて幸遠く
雨の日も働く居職羨れ

堺市 伏 見 茂 美

アベックへやける色気もまだ残り
夕膳に箸置き主婦の荷を下ろし

和歌山市

土谷 城石

コンピュータ出雲の神も首かしぐ
ネクタイをしめて社長の巡視待つ

小松市

四方天弘実

労働の汗だ夕日に深呼吸吸
神様のお告げ盛運下り坂

★

城が霧に包まれたとき抵抗がはじまる

清水 白柳

過保護の中に消えてゆく文化財

地球掘進裏側へ出るぞ兵士たちよ

大臣を過信予算を見て慌て

靴下を脱いで不信に触れずおく

川村 好郎

ほんとうの粗品と思う返し来る
なお残る笑顔と対話墓洗う

霊まつりあなた好みになれぬわれ
観光ブーム無人の島にしておかず

川端氏銀婚式祝う

今日からは金に成る道足たしか

西尾 栞

つゆ草をコップにさしてパンの朝

台風のとまどうたまま彼岸過ぎ

秋爽涼思わず言うて髭を剃る

探しものまだ見つからず草紅葉

小包は疎開の里の柿のかさ

北川 春果

交換の名刺は押し戴いて受け

歩き歩き考える性 世に埋れ

歯痛とまった嬉しさの落花生

アナウンスもなくローカル線降りてゆき

研究室飼わぬ鼠に悩まされ

若本 多志

心電図いい線が出て秋の空

命旦夕の友に冷たいエゴイズム

老人の日とは悲しき旗日なり

穢土厭離どころか居心地よくもぐり

大気汚染さりとて勤め変えられず

菊沢 小松園

代償のない恋さかずがしんたれ

舞扇囀の中に強う生き

仮面の下に人間の顔歪む

夢よも一度バイオレットを振りかける
あだ花でない気香水附けて来る

川傍柳 初篇研究

(七十七)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義 高須啞三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

586 くわよう婦人だよと嫁を引て出る

五鳥

藤井||華陽夫人は秦の始皇帝の夫人で琴の名手。二人の刺客に殺されそうになったとき、皇帝は二人に向かい、最後の思い出に華陽夫人の琴を求めた。秘曲の琴の音「君

聞けや七尺の屏風も躍らば越えつべし、羅

毅の袂も引かばなどか切れざらん、謀臣は

有無に酔えり、群臣は聖人の御助け」と繰

返し奏した。刺客はその琴の音に酔いしれ

たようになつていた。その隙に始皇帝は袖

を引切つて屏風をおどり越え、危さを助か

つたという故事がある。

気のきいた女は華陽夫人なり 一三・20

ひどいことにげろにげろと琴で弾き

二〇・36

この句は、単にわが家の琴の名人華陽夫人

だよと嫁を来客に紹介し琴を弾じさせただ

けであらう。

川端||賛。

琴のあなたへ花嫁を引きすへる
琴の新曲にふたあり気が付かず 筈四・24 筈三・33

高須||賛。

いい趣向拔身を琴で寝せつける
急なこと始皇を爪で救うなり

振切つて飛びなと華陽夫人いひ

清||賛。嫁の琴を故事で表現。

丸・岡田||同。

587 豆いりをする内ハいいきげん也

五鳥

藤井||子供に灸をする時、褒美として食わ

せる菓子灸饗(ヤイトギヨウ)と云い、

豆いりなどが用いられた。豆いりを食べて

いるうちは気嫌よく、そのうちに泣きだす

だろう。やがては

豆いりをかんだり顔をしかめたり三・7

となるわけ。

高須||二日灸の句。二月二日、八月二日、

どちらも二日灸と称して灸をするによい

日とされ、子供などにもすえた。

母も手をやく腕白の二日灸
可愛さが余り泣かせる二日灸
豆いりへ涙の落ちる二日灸

清||当時は灸が病気の予防薬だった。
子の灸は悪たい笑ひくすえ 一八・32

丸||「豆いりをする内」は豆いりを作つて

いるうち……ではないか。他は賛。

岡田||賛。特に二月二日の灸は効能ありと

当時いったものです。

588 まだもてそふな物と思ふ四会目

五英

藤井||三会目の事は前回も出たように、客

は大金を払わされる。四会目には、前回ほ

ど金をはすまなくても、前回同様もてそう

なものと遊客心理。このみみっちさ人間

らしくてよい。

川端||賛。

四五会目はどうも嬉しい事を云ふ 六・9

高須||吉原の句も、初会から三会目までは

沢山あるが、四会目五会目という句は少な

— 21 —



医師 福井野迷路

にこにことして癌の死を露知らず
ひよっとするとひよっとした患者の死
指圧なと針なと頼めと云う科白
死にまっかそらまあそんなこともなあ
腰痛へ孫の馬だけやめなはれ

医者と云う職業は病氣と同時に生と死にながら。基督は永遠の生命と叫び釈尊は無量寿と称す、凡人には人生五十年だ、五十や百は永遠や無量から見ると瞬間だ、塵である、この塵にも尊厳なる生死がある。哲学者カントは大病に直面せぬ限り生命の本体はわからぬと云った。明治時代の名医の最高峯青山通胤博士が自分の東大病院に胃癌で入院し死際

に弟子達を枕辺に呼んで、諸君の診療は万点だ只一つ患者に癌を知らせぬ方法に欠陥があると云った。こんな深刻な場面から日常茶番劇に至るまで医者の仕事は科目の多いのと同様に種々雑多である。

会社員 石倉旅風

古稀奇かく世故には疎く楷書かく
口先の嘘をよろこぶ暇が欲し
恒産があつてスカッとせん男
とつつきのわるい男とうまが合い
酔うているうちは人生悟り切り

はたらくところは、大企業会社を得意先とする奇妙な小会社、労資何れも多分に非今日の時代感覚を持ちながらその破調の交錯が不思議なハーモニーを奏でている所。相手方の重要な製作品の組立作業ラインを止めささない為誰もが三人前のパワーを出さねばならないこととなる。中卒が大学出の企画に従いて行く。机による経理を、古稀にもう手が届く神経痛の男が一日の走行百軒をその積算計に記録するクルマに、自動的ながら淡淡と乗り代える。はたらくうたの素材に充ちた場で働く川柳の無い、舌足らずの、没に値する詭弁。この辺で結べと制限字数の規定に、救われる。



同人特集

無職 小 畠 桃 路

ブラジルの汗のコーヒをジャズで飲み
何故和せね同じ血だのに人だのに
戦友を埋めた時もこんな露
何の自信かネクタイきゅっと締め
風呂あふれ魚はこけて妻はなく

生れた故に悩む俗世界、幼く父を失い学校も商売も嫌やで満洲馬賊に憧憬れ、自由の天地に心馳せる青春、電話局に奉職中母を亡くしブラジルに雄飛、大自然の中で人の尊さ働く悦びに若さが躍動、事なかば風土病に冒され帰国、結婚して生活の苦悶時代、大戦に南方軍属を志願し秘密部隊に配属ヒリッピン、シンガポール、マライ、タイ、ラオス、サイゴンを経て復員、疎開地丹波で関西電力に入社、文化体育で川柳を開眼、無鬼氏の川柳支部に協力、定年後宝塚に移り愛妻を失う、世界連邦宝塚支部結成、組織委員長急逝のため水泡に帰す、世界国家実現を祈って川柳するのみ。

主婦 川 端 柳 子

敵もなし味方もなしに日々多忙
姑と母故郷の味を忘れない
だまされる笑顔も母は持ち合わせ
言い負けることにも馴れて遠花火
愚痴はみな未来にかける夢で消し

姉や弟達が集ると「川端の味」となつかしがってくれるおすしを今日も仏様に供えました。私と大家族。がんじがらめの人間関係の中で夢中で過した時代がありました。私はサラリーマンの平凡な妻。狭い視野の中での主婦、マナイタのリズムお洗濯のリズムにやはり生甲斐を感じます。それしか取得のない私なのですが、私はそれに甘んじて事情の許す限りこれからもぬるま湯の道を行んでいく事でしよう。その中でせめて一句でも皆様に認めていただける句をものする事が出来たらとちよっぴり欲も持ち毎日をいそしんでおります。



医 師 川 口 弘 生

金出来ぬ手相と本に見えてあり
患者から医者 of 商魂教えられ
ソゲ抜きで抜いてお医者さんらしくなし
貧乏は孝子が出ると励まされ
払い得る喜び増えた税払う

呉服屋のボンが工学士になる筈のところ、
医科大学へ廻され、外科医志望だったのが一
人で出来る外科という名の耳鼻咽喉科医にな
って十二年目、いよいよ胃病にたたられて、
生きてな話にならんと開業一本になって丸八
年。額帯鏡の真中の小さい孔から世界を覗い
ての生活は、自分の目しか信用しない頑固者
に凝り固って来たようです。通院の子が渡し
て呉れる汗ばんだ硬貨に、幼き日の一文菓子
屋のおつさんを思い出します。おつさんと同
様に子供達と真顔でつきあって、若い若いと
云われて居るうちに、不惑を五つも越えた齢
になってしまいました。

学園理事長 羽 原 静 歩

クレパスの折れた瞳に母がいる
泣いた子のピカソするする出来上がり
幼稚園朝のショックがまだ続き
ブランコのボスが春風切っている
おむすびのひとつひとつにママの味

昭和四十一年、公立学校の教師生活をやめ
て学園に入ったが、同じ教育畑でも宮仕えの
暮しと経営者の感覚は、正に天と地の差があ
ること痛感した。特に公立幼稚園の増設をど
う受けて立つか。当然そこに私立としての職
員構成、設備の拡充、園児募集、資金面の融
通等、全く頭の痛いことばかり。又、嫁入り
前のお嬢さん達が多い関係で、職員は公立の
ように長続きはしない。更に最近の交通事情
によりスクールバスの運転には、殊の外神経
をつかう。とにかく将来の私立幼稚園の経営
は、文字通り私立独得のアイディアを実践す
る以外に道はないだろう。
公立にあっさりふられ泣いて来る



同人特集

倉庫業 垂井葵水

往年の不良にちよつと知恵を借り
お小言に蠅の動きを見て耐える
人形になれない知性はがゆくて
用のない犬までついて来る師走
クラス会やつぱり俺は遅れとり

「お前くらい呑気な奴はない」とは悪友どもの評。ひとの気も知らないで家内のもので同調しているのだから、敢えて弁明もしないフォーク車のふりまわしも出来ない程の小規模な倉庫に、居坐つて下さっている。古古米様のお蔭で、ヒマ人に見えるらしい。

お預りする商品は多種多様、その中へPTAやの、同窓会やのと持ち込まれては生来の「気弱さ」から、身辺に気がねしながらも儲からぬ仕事に精励する仕儀になつてしまうのである。度胸がないので、ギャンプル氏とは交際しないのを美点としている、私である。

コンピュータ―自社の倒産はじき出し

印刷業 新岡回天子

アポロほど進んで活字もう不用

(鉛をとかず熱など不用)

何千度用なし新聞社も写植

活字とはただ書いてあり写植

大きくも小さくも自由其のまま写しとり

銅版等不用絵も字も一緒にの写植なり

肝臓が悪いから黄胆だ、それが眼に見える程ハッキリと手足の皮膚に出ていた。それだけなら良いが、物を食べれば吐く、その吐き気が苦しいのだ、お腹の中にもうなんにもないと思うのに吐き気がくる。

お腹が締められるように痛い、胸が突き上げるように苦しい、便所にも寝床にも居られない、夜通し寝られるどころではない。

検査の結果、癌でないことは判った。

それが今日退院だ、七カ月かかったが治つて良かった。

「先生治りますかと患者聞き」



会社員 高杉鬼遊

秒よみに似て駅までの朝が出る
枕木のその下にいる石が耐え
求人の旅トボトボと山を越え
辞めますと言う切り札へああそうか
汗臭い男の銭へ酒を売る

会社員と称してもホワイトカラー族にあらず、作業帽にナツパ服、管理職とは年功の手前の役付と言うところ、人手不足の職場をトンビのようにあちこち、隙をみては帳簿の整理、銀行、監督署、健康保険、職安へやつたら自転車で参ります。
遙か遠い生産目標の数字に向って自分の健康管理等もつての外、このまま職場に倒れるとも悔なしと尽忠報国の精神、かつて日本の過去にもこんな時代がありました。何かが何処かで間違っている。ゲバ棒を振る若者の人間性が羨ましい。

はたらくうた執筆者

第一回 (昭和四〇年)

——丸川初甫、山川阿茶

工藤甲吉、直原七面山、服部十九平、西出一栄、山内静水、児島与呂志、河井庸佑、久米奈良子、野村味平、傍島静馬、金井文秋、橘高薫風、若本多久志、清水白柳。

第二回 (昭和四一年)

——若柳潮花、本田恵二

朗、隠岐不醉、戸田古方、河村日満、寺田花宵、池田古心、清水一保、有働芳仙、木村涼人、森下愛論、三井酔夢、西田柳宏子、菊田いさむ。

第三回 (昭和四二年)

——川村好郎、中村九呂

平、藤井明朗、天正千梢、小林トメ子、楠田英子、谷沢好祐、那谷光郎、河原みのる、太湖平、福井多蘭子。

第四回 (昭和四三年)

——早川清生、中川滋雀

大坂形水、藤本礎山、村田飄太、岩田美代、不二田一三夫。

近 詠

須坂市 高峰 柳 児

飲んだだけの末席取賄洗われる

聞き役の立場で結論あわてない

言いがかり呼鈴を強く押し

別居して余生忙しくうずくまり

大洲市 米澤 曉 明

人情も水も景色もよい僻地

急用は麻雀だった欠席者

たわむれの風へもゆれる月見草

火の粉を

高 鷲 亜 鈍

火の粉を消さんおもしろい怨嗟の眼

高原の花野の花見さだめつかぬまま失明

ネスカフェー、シユガーミルク熱くして飲む

迷惑をかけたくないという出不精

披露宴お望みどおり欠席す

めくらぐらいでとなめさんまだ慣れぬ

呑みにくいどころか胃カメラ押しこまれ

今治市 月原 宵 明

独り言みたいになへ申上げ

深水をミレーの額に替えて秋

急がない時だけ渡る歩道橋

糸瓜伸び過ぎて己の意志がない

和歌山市 秋月 宏 方

きょうという日も無事だった夕ご飯

小商人寄れば売上げききたがり

昭和元禄園児も唄う恋の歌

社長専務も働き蜂だ小企業

今治市 長野 文 庫

失明はしても鈍感なのは生れつき

純粋は売れないからさ分らぬからさ僕の詩は

大きなものでは奈良大仏観ずに過ぎ

手筋のように畳のへりを伝う

太陽に強く夜露に弱し雑草よ

庶民を掘りおこし詩を見つめんか

一字一句を粗末にすまじ詩を刻む

泣いたとて自分が自分で泣いただけ

さがすのはマツタバコのケースだけ

夜はふかくふかきいのちを愉しみて

茶の味も分らず稼ぐばかりなり

抵抗もなく伸び浮草の根が淋し

薬草を売る香具師として手甲つけ

日曜日みなしるしつけ趣味多忙

小松市 山上 千太郎

よい空気吸うのに暇と金が必要

軍手を買って土いじり好きという

くず入れという名の民芸品を愛で

自からを老いばれと云いまだやる気

名古屋市 長谷川 鮮 山

台本に希い叶った役どころ

耳の痛い話席から一人消え

その辺にしとき蔭から母助言

昼も夜もなき元旦の朝寝

時計が刻む生命を刻む六十路

それだとして盲の愚痴というものさ

遠くからみてくださってる御親切

押売りへ雑談二時間してかえし

先輩も後輩もなしに写真とる

地位がありそれゆえ僕はさようなら

医者が匙投げ酔いどれにまた戻り

追いつかれ便所の前で立たされる

大阪は僕の不遠慮許される

剽窃縦横だん

東野大八

と二代目天翁になりすましたようなものである」

水は流る天地の外
山色 有無の中

これは王維の詩である。ところが権徳与（唐の詩人）は「晚揚子江を渡る」の詩に

遠岫 有無の中
片帆 煙水の上

とある。ところが歐陽修の長短句（詞）に

平山の闌檻 晴空に倚り
山色 有無の中

とあり、三人の詩人が御丁寧に「有無の中」を三度トライ回しにしている。ところが蘇東坡までが

記取す醉翁（歐陽修）の語
山色 有無の中

と四度目である。この「有無の中」を彼は歐陽修の創作とかんがえたわけである。

汪鈍翁が顧云美に贈った詩に

佳句あり、然れども往々にして陰鏗に似たり」と評しているほどだ。苦勞人の杜甫にすれば、そんな言い方でしか先輩を評し得なかったのだろう。

俳句、川柳、短歌などに類想句がはなはだ多い。ひようぜつ、盗作などとひどい陰口をきかされた句もそこそこにある。
ところで中国でも、唐詩選社中や、一般の詩句の中にも、同様な創作面の事例は山積して車にひくほどある。
宋の初めのころ、朝士たちの間で、李義山の西崑体の詩を模放する風が流行した。さる役者が、乞食みたいな風態で舞台に出たのでそれやなんのマネだ、と問うと、その作者は李義山の姿ですと説明して言った。
「このごろ、史館の皆様から引き裂かれ、むしり取られてこの有様です」

盛唐のころは、他人の詩巻からいいところを失敬したり、古本をひっくりかえして詩句のかんどころを焼直したりするのは日常茶飯時。李太白も馳け出しのころは、陰鏗（六朝末期の詩人）という大した作品でもないものをしきりに踏襲した。のちに杜甫が「李候に

北齊書「魏収伝」には、唐の詩人がさかんに六朝時代の無名詩人の剽窃をやったことが書かれているが、漢代では、淮南王（漢の高祖の孫、文人）が、随の大学者で詩人の王通の詩章をさかんに焼直した。有名な「漢書」を書いた班固は、詩人で知られた班彪が実父であるのをよいことに、憶面もなく盗用して「子が親のものをうけつぐのは、さて詩章として同様であらうか」と、宮廷人に皮肉られた。後の文人で名高い陸行（清代）は、この二例を評してこう書いている。
「世に名高い詩人が他人のものを失敬しても誰も何もいわない。そうでないものが下手に焼直しをやると袋だたきの目にあう。班固は、仙境の竜本を盗んで天に登り、うまうま

家は緑水長州の苑に臨み
人は青山短簿の詞に在り

とあるのを人々は佳句とほめたが、これは日本
の使臣天祥が虎丘寺（蘇州）に題した詩に

樓台 半ば落つ長州の苑
蕭鼓 時に來たる短簿の詞

とある。この方が先に出たので、汪が日本人
から盗んだ理屈になる云々と郝行が「麗書堂
筆録」に書いている。彼はこととこう記し
ている。

「私はひそかに思うに詩文は小道である。
たまたま文句のいいのが人々に伝誦されたり
あるいはだれかれに引きかれ、むしり取られ
たりするのも、みな風流のわざなのであつて
それをとやかく詮議だてするのはどうかと思
う。大処に立つて申すなら、おびどめを盗ん
だからとて死刑にはなるまい。（莊子の語）
そのようなもので、何の罪することがあろう
服虔（漢の桓帝の師父）は、左伝の注を作る
のに鄭玄から失敬したし、郭象（晋の大儒）
は、莊子を注するのに向秀（竹林七賢の一人）
のものを剽窃した。昔も今もよくあること
で、まあ深くせんぎだてはしない方がよいと
思われる」

孟浩然（盛唐の詩人）は

微雲 河漢淡々
疎雨 梧桐に滴る

の名詩句に、満堂の詩群みな筆をおいて、せ
きとして声を失ったとある。ところがこの中
の一人は、会が果ててのち、数夜をかけ、そ
の類句、原句を群書に漁り抜いたという。こ
ういう手合が、中国のむかしの詩壇にもいた
のである。

漢・唐・宋代を通じて、史章、詞文、詩句
に長じたものは、榮達の門が広かった。殊に
盛唐以後は、官廷にアカデミックなハイウエ
イが通じた。地位や名声や、恋までが絢爛と
織りなされ、いわゆる代作屋まで横行した。
すなはち、名流貴人のろくでなしの子弟が、
不遇をかこつ老儒や、へそ曲りの野賢にそれ
を求めた。報酬はゼニか酒か、需要あれば生
産ありで、官途無縁のうさ晴しもかくて縦横
であった。才乏しくも名を盗め、今様サラ
リーマン出世譚にも通じる事例は中国官廷で
も枚挙に暇がない。

薄俗 官を休むるは物故に同じく
畏途 職を削らるるは遷除に当る

これは虞山（清代の詩人）の詩句だが、役
人が職をトチったら死んだも同じだという。

かの屈原でさえ、もとはといえば失職が自殺
のもとを作ったのである。白棄天もうたう。

多少の朱門は空宅を鎖し
主人は老に到るもかつて帰らず

役人でクビになったり、降等させられたり
札つきの領職は生命とりだと、熱官（景気の
よい役）にうつつを抜かず。宰相のバカ息子
を、詩文でおだてあげ中郎（官廷秘書官）に
なったのもいれば、遷除に当ってぐちを詩章
に托したばかりに首を切られたものもある。盗
作、剽窃などこうみると、漁官争奪の手段で
あって、やらぬ奴がバカみたい。晋の王敦は
役を仕損んじ、たんつぽをたたいて曹操不遇
の際の感慨を口癖にどなったので、たんつぽ
の口がみんな缺けて無くなってしまったとい
う。

こういう風に眺めてくると、中国の詩壇も
千家騒淫でいささか血なまぐさい。朱門の空
宅をとざし、落魄の旅人で終った詩聖杜甫は
そのどん底の一人。こうした粘着力を世事に
失った旅人の淡懷無辺さこそが、やがて日本
の俳諧にうつがれ、柳樺にまで旅人趣味は
おしひろまった。こうした杜子美（杜甫）の
詩魄こそ、川柳のロマンかと思うと、川柳人
は幸せである。だが、彼、杜甫はそのことを
夢にも知らない。

川柳徳川記

(九)

富士野鞍馬

家網

四代家綱は家光の長男で、母はお蘭（法樹院）寛永十八年（一六四一）辛巳の生れである。慶安四年（一六五一）四月、父家光が死んだので、十一才で將軍になった。

政治は、家光の異母弟で、家綱にとって叔父にあたる保科正之を筆頭とし、大老酒井忠勝（若狭）老中阿部忠秋、松平信綱らの合議制であった。

由井正雪の陰謀

江戸牛込袋町に兵学道場を開き、楠氏の後裔と自称して、四千の門弟を養っていたといわれる由井正雪は、丸橋忠弥等と結んで、徳川幕府打倒を計画した。

牛込先生とんだことをたくみ
と川柳に詠まれ、

（傍三三）

その徒党は二千人といひ五千八百人ともい

われている。家光の死んだ時を利用し、道灌山に人数を集め、忠弥は二の丸煙硝蔵に放火し、江戸水源に毒を流し、正雪は駿河の久能山を奪い、大阪に吉田初右衛門、金井半兵衛京都に熊谷三郎兵衛、加藤市右衛門等が居て一斉に蜂起する手配をした。

あさつての晩と道灌山へ寄り（六四二）

あさつての晩日暮しへ寄れと触れ

日くらしの里夜ばなしのおそろしさ（安七二）

正雪は紺屋の息子といわれていたので「あ

さつて」で、それを洒落ている。日暮しは道灌山である。

ところが慶安四年（一六五一）七月二十三日、奥村八左衛門、弓師藤四郎の訴えで発覚

色紙短冊
書画用品

大坂戎し市

丹精堂

を申せしや

し、江戸の丸橋は召捕られ、二十六日に正雪は駿府で自殺して事件は落着した。

玉川の鮎もちつとでみなごろし
ぐれつく橋をたのんだがおちどなり（九五）

注進注進注進と藤四郎
ふといやつするがと江戸でとらへられ（傍二三五）

紺屋の息子あさつてにして亡び（傍二六）
もうあさつてといふ時にあらはれる（安七二）

富士の根方で慶安の雪は消え（二〇三八）
慶安四藍より青くしたまわす（五五二六）
慶安の雪にいとわぬ松の色（九〇二七）

と川柳に詠まれている。この陰謀には、紀州頼宣も加担したという説もある。

左様せい様

家綱の時代に、玉川上水が完成し、明暦三年（一六五七）一月十八日には、俗に「振袖火事」といわれる大火があった。それまでまた万治三年（一六六〇）に、はじめて大川に橋

が架けられ、それが両国橋である。
二ヶ国にたまつた用の渡り初め（初6）
明暦の大火直後には、吉原が浅草へ移転した。

吉原が田圃へ引けて猪牙が出来（一七三〇）
明暦二年（一六五六）に酒井忠勝が辞職し
寛文二年（一六六二）には松平信綱が死に、
同九年には保科正之が辞め、同十一年に阿部

忠秋が辞職した。そのあとは大老酒井忠清（姫路）が、副將軍のような勢力をふるい、家綱は、万事「左様せい」というだけであつたので、世間では「左様せい様」と绰名されたといわれている。そうして延宝八年（一六八〇）四十才で死んだのである。
なおこの時代に、伊達騒動、越後騒動があつた。

八木摩太郎著

「堺の川柳散歩」（二百円）

堺古今詩藻集

川村好郎

八木摩太郎氏程郷土愛の厚い人は少い。堺に生れ、堺に生活しつつある氏は、真情を籠めて堺を愛し、川柳を通じて堺文化の古今を紹介して余すところがない。よくもこれ程資料を集録せられたと感服する外はない。そして我々にもっと郷土に対する愛着を持たねばならない事を教えてゐる。

堺を詠んだ川柳として名所旧蹟を先人等がどう詠んでいるか、そして現代の川柳家が今日変遷発展しつつある堺をどう感じているかを比較してみると興味が深い。選らばれた句は路郎水府両巨頭の名句だけでなく、現在活

躍しつつある主として堺在住の新進作家の佳句を多く載せられていることは一層親しみを覚えるのである。

謹んで拝せば御陵ただ蒼し
仁徳の帝にすまぬネオンの灯
一力を出て来る人へ浜は暗れ
夜市しらじら蛸もまた朝の顔
雑魚取りができた堺の浜は消え
大浜も煙たなびき海遠く
浜寺に迫いはぎが出た若い頃
浜寺の松のみどりへ排気ガス
旧蹟を泳んだ数多くの名句も遺すことを忘れていず、堺を愛する熱情も宜なるかな。

蘇鉄寺腹の切りようまで教え
客を背に餅売れること売れること
情熱の歌駿河屋の紺のれん
この襖一枚ほしい大安寺
寄せ書のような文珠様の壁

路郎美 茂郎 路郎 水府 香豊 志寿 抱月 路郎 路郎 路郎 摩太郎 夢成

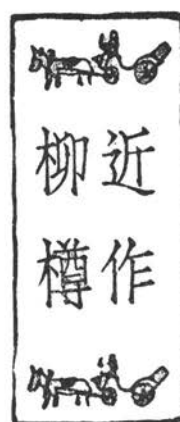


磨かれた伝統の味

司子集
鶴屋八幡

本店・大坂市東区今橋5・電話(203)7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996
売店・各百貨店のれん街

摩太郎氏のこの快著によって改めて堺を見直したのは私一人ではないであらう。
発行所 堺市九間町東二丁九（八木方）



菊 沢 小 松 園 選

出雲市 王

紫

大阪市 里

小路

人類の勝手が月へキスマーク
逆境の友へ私見は引つ込める
狭き門抜けてここからの孤独
虫の声余命いくばくかは知らず
踏んづけられてたまるかゴキブリ死んだふり

島根県 石 田 清 泉

はがえじめにされても百姓生きており
くたびれた蔓にうら成りしがみつ
造林の深いみどりも孫のもの
近代化農法借金抜けきれず

京都市 藤 本 征 山

人柄を見せているようシャツの白
笑み見せぬ婦長へ博愛見つからず
冷房が利いててまばら一等車
馴れた頃ルールかわって迷わせる

給料日商店街も指を折り
甲斐性で遊べぬとこで遊ばされ
鈴虫の音が美しい妻の留守
道連れの写真忘れた頃届き

大阪市 和 田 痴 亭

パチンコの眠いこれでも人手不足
お隣りの示威クーラーで眠られず
花缺発止と愛のきずな断つ
吹き溜る馬券へ虚ろな目が走り

松江市 村 松 醉 歩

腰曲げてアルミ貨拾うさだめもつ
幻で女の顔がちらつきぬ
ライバルの後姿の大きさを
松風でもてなされたり寺貧し

広島県 岩 谷 二三 枝

洗つても消えぬ汚点が掌に溜る
明日を生きる仮面繕う針である
駆け抜けたはずを迷いの淵にいる
散るすべを知らず造花は四季を炎え

大阪市 小 谷 葉 子

神経がピリリドラマの席はずす
熱情にふれてぶどうの艶も増し
アイライン心の鍵はとじたまま
潮しぶき心のにがり洗うごと

岐阜県 市 川 鱗 魚

カマキリの半端な色で秋が立ち
秋の庭夜露の萩がまだ起きず
ねたっ切り咲いて見事なこぼれ萩

八尾市 高 杉 千 歩

花も又老えば醜し手を貸さん
笑う児の視線を追えば雀二羽
ふり向かすすべなし秋も果てと知る

東大阪市 宮 西 弥 生

広島原爆ドームに立ちて(二句)
合掌のまま広島を去る重い足
ある夜ふと女鍵を忘れたき
窓を打つ雨に孤独の夜長く

大阪府 黒 田 真 砂
色褪せぬ造花にもあるもの想い
ゆるす気の背へ風鈴そつと鳴り
サングラス掛れば美人めく心

島根県 小 砂 白 汀

軒しのお吊られつ放しの夏おわる
近よるものすべて疑がう栗のイガ
ゴキブリの踏まれるためにもぐりこみ

島根県 堀 江 正 朗

妻は月僕は虫の音 楽しまん
せかすから入歯忘れたまま受話器
せっかちになって歩調の合わぬ日々

島根県 堀 江 芳 子

未練絶つはずのお酒に泣いている
知っている鏡へ若く写したく
こおろぎの笛吹くごとし秋深む

守口市 岸 本 豊 平 次

敬老の日も留守番をかって出る
停年の引き出し残す物もなし
すれ違う電車が擡う片思い

岡山市 谷 森 和 風

健康な寝息が明日を約束し

猫の足ふいて子供のない夫婦
しわ寄せが庶民のかたにのしかかり

平泉

今治市 原 田 輝 親

東光のガメツさばかり光り堂

山寺

山寺は芭蕉以来の蟬の声

野口英世記念館

見せ物にされているとは露知らず

今治市 今 井 松 花

鯛飯の口に吸物やかましい

退職をしたと保険をすすめに来

百姓の嫁で混み合う教習所

鳥取県 林 露 杖

燃え切った女の顔を灯にさらし

恋捨てたあの日の色の花氷

ゲバ振った顔にはみえぬ子で帰り

八幡浜市 別 宮 すすき

もう秋だ秋だと風鈴なりつつけ

先生の恋PTAに波がたち

つきそいの母マイナスになる見合い

出雲市 竹 内 李 朋

息を吞むほどの女でいて白痴
ふるさとへつづく空あり夕焼ける

アポロ11号

万葉の月の光を恋しがり

鳥取市 藤 本 佳 女

寡婦だから親切まともに受けとれず

美しく生れ日蔭で狂い咲き

純情な恋がゆれてる貸しポート

大阪市 功雄改め 江 城 修 史

共稼ぐ妻へねぎらう語をさがす

別れねばならぬ涙は空へ向け

故里の空は涯なき青さもつ

鳥取市 稲 村 光 枝

妥協せぬ心を隠す煙草の火

人畜無害だけでは娘の気に入らず

埋もれ木で終る筈無い世間の目

松原市 守 屋 万 竿

太陽と空気があった志摩の海

寄せて波砕けて散って飽きさせず

千年の昔のままに海女もぐり

敬老の日も弁当箱持って出る 東大阪市 落 合 思 月

ながい目で見てほしいとは好きな仲間
うなずいてくれたは金のない親類

鳥取県 川崎 秋女

言うなれば疲れでしょうと医者 of 逃げ

二十年未だ使えますと保証され

礼言うてそつと寝させた扇風機

和歌山県 ふきあげ 虎城

努力したあとの荒涼たる虚栄

賭のある夜の口紅にしては濃く

イヤリング外して主婦の座に戻る

尼崎市 中谷 利美

ボタンよりチャックよい時わるい時

あっさりと親に貰った顔を変え

名前まだ覚えぬうちに消える歌手

神戸市 来住 タカ子

灯を消せば人恋う波のひたひたと

改めて硬貨かぞえる小商売

旅の人偲べば折鶴はばたきぬ

大阪市 岡本 まさひろ

赤青を犬もチラッと見て渡り

山にいない虫デパートにタントおり

貸しビルとヤッパリ斜めにはってあり

大洲市 堀内 曉風

儲け口恋もレジャーも後廻し

芸に身を助けられてる花魁

いけ花の蕾は咲かぬままに捨て

大阪市 堀口 欣一

七〇キロあって我家の皇太子

城東区難波戦記に出るところ

このへんに泉州堺まだ残り

仙台市 川村 映輝

名を秘して小さい善意積みかさね

うそつきの本心本人だけが知り

指定席から空のまま幕があき

鳥取市 近藤 秋星

豊作の報に政府は吐息する

空砲は秋が来ました音で鳴り

敬老の日には関係ない若さ

今治市 古野 伶人

見張役ママはビキニで無い水着

古古米もある商人の値が上り

竹原市 三宅 不朽

甞がえる太郎花子よ赤トンボ

愛憎の臉とじればなおつものり

倉敷市 竹 内 翁 童

借金の云いけ不渡りつかんだことにする
引越しの手伝いわが家はまだ建たず

大阪市 有 信 新之助

警笛が車どけさす音で鳴り

郷愁は子供が残したなんばきび

岡山県 武 元 柳 子

落ちついて居れんというてまだ坐り

子どもとはや馴れ合つた金魚売り

京都府 福 村 飛 龍

肩書のつかぬ名刺でそつと出し

青柿も生花になる床の上

札幌市 平 野 青 夜

歩み寄るライバル握手に火花散り

人生もハッピーエンドに餓えてる

河内長野市 森 本 黒 天 子

赤電話声を落すに骨を折り

親切の度を過ぎたのをふと気付き

大阪市 藤 田 頂 留 子

近代化見下しゆうゆういわし雲

誘拐も特攻隊もはたち前

竹原市 生 信 笑 子

ミコの朱のチラチラ神もおちつけず
アベックのそれぞれ違う願い事

岡山県 目 賀 芳 月

平凡な暮しの中の宝くじ

信じたい信じとうない人に会い

河内長野市 井 上 喜 醉

骨抜きになってタワシは見捨てられ

大物のへちま庇で寝てしまい

鳥取県 大 山 果 風

働きの限界を知る古稀となり

伸びて行く知恵に子供をあなどれず

竹原市 森 井 菁 居

散り果てた百合に孤高の過去がない

夏草も次代へ托す実をおとし

和歌山市 吉 野 富 子

うっかりと触った神に崇られる

嫁姑低い姿勢で恙がなく

和歌山市 増 田 次 章

コンピュータとり残されていく自分

夕焼けを歩く明日をうたがわず

鳥取市 有 田 鹿 子

離れては又寄る雲よ愛哀し

大阪府 井

上 美恵子

晴耕の母に報いるナストマト

コオロギが鳴いてももうすぐ嫁く私

島根県 志

賀 美 栄

武装して愛たしかめる紅いバラ

豊作を詠びて稲穂は深くたれ

大阪府 西

本 保 夫

本心をすぐ云うくせで出世せず

平社員の本クにも小犬ついて来る

藤井寺市 古

結 百 水

老兵は消えゆくさだめと悟るべき

愛惜む心に墓標建てんとも

広島県 南

条 露 声

ばあちゃんがまけば雀がよってくる

台所今朝は軍歌の声になり

大阪府 小

出 智 子

四季のない菊になっても秋の色

ジャンプしてこの青空に染りたい

大田市 藤

田 軒 太 楼

徒労とは知りつつ手探りまだ続け

新調の傘を貸してるママの見栄

羽曳野市 麻 野 幽 玄

傷心は癒えず他人が触れに來て

じゃんけんに負けても末っ子先に取り

岡山県 山 田 止 水

平凡に生きて鎌とぐ朝ぼらけ

恵まれぬ娘かえらす背に詠びる

京都府 明 嘉 彦

囑託として切売りをする知識

制服の下に萎んでいる個性

和歌山市 大 家 守 夫

争いの物音もなく金魚鉢

犬小鳥飼って人情うすき人

羽曳野市 飯 田 一 治

仕合せな指だと指から抜いて見せ

いま咲いた花びらもう反っている

京都市 丹 羽 英 二

すだれ越し眺める月へ人が立ち

手ごたえの割に小さな魚釣れ

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

帽子に線ああ人類の差別好き

辞令辞令一家遊牧の民に似て

大阪府 田 中 多 幸

病人の前で西瓜の味をはめ

酒造屋の主人が好きな黒田節

米子市 増 田 竹 馬

マネキン人形僕の月収軽く着る

借金のように思えぬカーローン

大阪市 大 西 為 二

菟弱を結んで煮るも母の知恵

子の知恵はバナナの皮を二度にむき

倉敷市 小 野 克 枝

お上手を云わない主義でよくはやり

従いてゆく運命へ白い割烹着

高知県 山 川 勝 子

倦怠期味噌汁さえも面倒がり

新築へ明治のタンスの納め場所

大阪市 木 村 渥 水

クーラーを見に行きヤッパリ団扇にし

野良着ありミニあり避暑地の盆踊り

鳥取市 夏 目 葉 舟

借金で苦しむままの年賀状

トロフィをかざす真下へまだ立てず

豊岡市 不 二 本 和 久

落着きを見せて中年和服着る

こう言えばああ言う法規に裏表

鳥取県 藤 泰 嗣

寄せ書きへ人それぞれの個性出し

新聞は積んだままなり農繁期

鳥取市 藤 本 恵 子

同じこと聞いてもビリの子トップの子

父小康母もいびきをかるくたて

米子市 源 氏 勝 久

株持たず暴騰暴落おもしろし

風邪をひく間もないなどにくい奴

岡山県 尾 田 水 仙

お月さまうさぎの住んでるままでよし

和歌山県 加 納 花 秀

パパママのダンスふんだりふまれたり

宿毛市 瀬 田 美 知

その気になればなんとかなる気がまだおきず

広島市 楨 田 英 詩

秋の山カラー写真のように澄み

八代市 船 木 史 朗

逆さまに懸けてもピカソほめられる

七尾市 松 高 秀 峰

式決り野良着の似合う娘に育ち

愛媛県 燈 本 満 子

溺れたと見せて男のズルイ愛

和歌山市 増 田 めぐみ

美しい人にも同じ影法師

新潟県 高 野 不 二

親もいるだろうにキックボクシング

大阪府 河原林 比呂路

再娘に踏みきる寡婦のネックレス

竹原市 時 広 一 路

これ以上言えぬ言葉を眼で語り

松江市 大 峠 可 動

すりきれた心嫌って陽がしずむ

神戸市 横 山 孜 孝

溜息の訳は財布に聞いてくれ

島根県 梶 みどり

燈籠の置き場をかえて庭が生き

泉佐野市 大 工 静 子

雄弁に嘘でも皆がついて行く

石川県 同 村 虹 要

上役にどこかにいるモンタージュ

寝屋川市 福 富 隆 子

転職の度に無口な娘になって

羽咋市 三 宅 ろ 亭
台風の時だけ妻は釘を打ち

大阪府 平 井 露 芳
今死ねばなんぼと決めて生きて居り

富田林市 木 村 弥 栄 子
心の死恐るもの無しニヒルめく

貝塚市 行 天 千 代
思い切り燃えた顔とは思われず

愛媛県 西 田 富 士 夫
地下茎の暴力団は又芽吹き

出雲市 飯 塚 全 喜 知
過去秘めて一人暮しのかやりたく

島根県 大 森 孝 華
はれていぬそぶりへ知った恋ごころ

島根県 中 島 英 子
母さんの化粧まどわすコマーシャル

笠岡市 谷 本 鈍 愚 坊
信念を通してヘソ曲りにされ

出雲市 板 垣 草 丘
魚トラク浅い眠りの夜をうなる

大阪市 木 村 久 子
貧乏はいつまでつづく肩のこり

熊本市 北川 一進

ともかくもテストの済んだ帰り道

高槻市 山田 スミ子

総日記の掃除した事派手に書き

鳥取市 藤本 和宏

僕ひとりかけても一億にはならず

鳥取市 藤本 鎮也

駅弁はやめとこ故郷がもう近い

鳥取市 河口 忠志

役付きのこの椅子一つがままならず

鳥取市 米原 一稔

冷房があるから続くアルバイト

鳥取市 山本 珂也女

思い出の帯だが少々派手になり

鳥取県 中沢 慎利子

嫌われて居るとも知らず世話が過ぎ

月を見て静かな海はどのあたり

子に親がわびてる迷い子収容所

帰りつくまでが地獄のカーラッシュ

車窓の目一人じめする富士の山

果物屋に立てば季節の香が匂い

肩叩く孫はじめから数をきめ

聞えても聞かぬふりするお年寄

病人のツメを切りつつ嘘を悔い

大阪市 国広 ひさ絵

大阪市 大池 芳

大阪市 鈴木 生仏

大阪市 田治 一登

大阪市 花田 繁子

大阪市 今井 隼人

大阪市 村島 秀村

大阪市 吉野 志津

後藤梅志著

「秀句鑑賞と

梅志句集」

送料共 ¥.550

作句力とその選句眼は、故麻生路郎先生から折り紙つきの後藤梅志氏が敢えて世に問う快著である。

序文に麻生霞乃女史、第二序文に相元

紋太氏、抜に清水白柳氏などが執筆されている。

秀句鑑賞にはあなたの佳句が登場、印刷の関係で四十五年一月下旬発行になりますが、限定版につき申込みは早や目にお願いします。

発行所 大阪市南区鰻谷仲之町二〇

川柳塔社

おとろけおとろけ

本多柳志

◆きのうきょうのテーマにしては、いささか旧聞に属するのでありますが、昨年十一月川端氏がノーベル賞受賞の為、ストックホルム滞在中の出来事でありました。受賞式のあと、記者会見の席上、一外人記者から「先生は今年度の賞金は何にお使いになりますか」と質問されて「私はスエデンで載いた賞金を、全部日本に持って帰るつもりはありません。ス

エーデンで使つて帰るつもりです」と答へられた。之を通訳して外人記者団に被露したのが、例の川端文学の英訳を専門にやっていたサイケン氏だったのです。ノーベル文学賞の詮考の対照になったのは、日本文の原作ではなくてこの人によつて英訳された、川端文学の秀れた美しさであつたのです。

氏は川端氏が「スエーデンで使うつもり云々」と答えたのを「スエーデンに使うつもり」と誤り伝えたらしいのです。翌日の新聞は「日本の川端氏はノーベル賞金を、スエーデンに寄附して帰るつもりらしいと報導したのであります。驚いた川端氏は、私は決してそんなつもりで云ったのではない。スエーデン「で」と答えたので決して「に」とは云わなかった

と抗議したと云うことです。
サイケン氏程の語学者にして、この誤りではありません。川端氏と共に今更の如く日本語のてにをはのむつかしさを痛感したと云う事ではありません。

◇「てにをははマツチのようなもので、ていねいに使うと重宝なものだが、ぞんざいに扱ふと大事になる」とは、私の寸言で申したところですが、私共が作句の場合にもしばしば感じる事ですが、かりそめの一字が句意を曲げたり、第三者に作意を誤解されることもあり得ますので、神経質なくらいにデリケートな心遣いを使いしたいものだと思います。

又聞きの事故へ新聞読みなおし

柳志

大阪文化祭第21回川柳大会

日 時 昭和44年11月23日（日）
11時開場・午後0時半開会
会 場 毎日新聞大阪本社講堂

宛締	投席	兼講
先切	句題	題演

兼・席題の優秀句

「おんな」
「ブーム」
「コンピューター」
「団地」
「開通」

（当日2題発表）

各題ごとにハガキに2句
住所・郵便・氏名・雅号明記
11月1日着限

〒530 北区中之島一

前田 勇氏
伊東 静夢氏
金 泉 万庵氏
中島 生々氏
広瀬 省選
堀口 塊人選

主催 大阪府・大阪市・府教委・市教委



友の会募集
＜カトレヤクラブ＞

友の会発足3周年記念10月会員大募集
お買物資金の積立にたのしさがプラス
しかも 満期までの間にいろいろの楽
しき催しにお招きいたします 講習会
や文化催し、旅行、観劇など……

会費 1ヵ月(1口)…… 1,000円
ご入会はいっでもお好きなときに幾口でも…
入会金は不用です

◎ご入会お申し込みは 6階友の会受付へ



大坂大橋
松坂屋
月曜定休・電943-111

秀句鑑賞



……前月号から……

清水白柳

バーのママもう友達距離でなし

小出智子

学校時代から気のおけない友達で、つい先頃まで水商売だが真面目に働いているということだったが、頭の切換えの早い娘だったからもうバーのママさんとして押しも押されもせぬ貫録を身につけている。地味な家庭の主婦と派手なバーのママ、身なりだけではない心の中にもへだたりが出来たのではないかと作者はふっと淋しくなったのであろう。

モーニング五尺五寸は是非ほしい

渡辺曉童

最近の若い女性の身長は一六〇位は普通で、これにハイヒールをはかるともっと高

く感じられる。花嫁姿の高島田でも同じことでモーニングを着て並んで立つには一六六五はどうしてもほしい。私など五尺そこそこの小男は若い奥さん方と立話をするとき見下ろされて気のひけることおびたしい。男の穿くハイヒールがないものかと昔から思っている

抱きあげて空の広さを子と分ち

渡辺南奉

「空の広さを子と分ち」という表現は立派なものだと思う。古来いろいろのあらわし方があった例えば「大阪見たか京見たか」といったように使われて来たが、この句は現在として決定的なものを持っているのではないかと思つたほど心をひかれた。

馬鹿な雀で公害へ住み馴れる

国弘半休門

羽があつて飛ぶことが出来るし、どこへでも巣をつくれるのだから、こんな空気の悪い処に居らなくても人間共が思っているのだから、雀の方から見れば人間程不自由なものはないと思つているかも知れない。馬鹿なのは雀でなくて人間だよこの句は教えているように思つた。

時は流れる 足音がきこえない

増田次章

沖繩返還のことや七〇年安保の問題、また

大学問題など、関係のあるなしに拘らず世の中はゆれ動いている。無関心を装おつていても新聞やテレビでいやでも目にはいる。それは大きな世紀の足音なのだが、庶民には聞えないのだろうか。耳をふさがずにじつくりとその足音をとらえなければならぬと思う

リベットになり切ることに躊躇する

戸田古方

鉄骨工事なども溶接技術が進んで来たのでリベットを打つ音が聞えなくなつてしまつた。この句の持つリベットの意味は、子はカスガイということの強調ではなくて、人間関係の結合になればならない役目を果たするのが御免だというように作者は言っているのではないかと思つたのだがどうであらうか。

耳や聞かないで泣かせるだけだから

堀江芳子

泣いているのは子供ではない。大人かも知れないし、年頃の娘なのかも知れない。作者はあきらめというか悟り切つた心でその泣いている姿を見つめている。そこには言葉にならない心の奥での対話を感じさせられた。

長男急に左眼失明す

雑沓のどの眼もみんな美しい

三井醉夢

「岡大眼科入院」までの一連の作品を読ん

でその突発的な出来事に作者がどんなに驚かれたであろうことを思い、そして一日も速かに御快愈に向われることをお祈りする。その驚愕の中でかくも冷静にものを見つめて作句せられた作者に敬意を表すると共に、矢張り句は生れるものであること改めて教えられたと思う。

レジスタンスの蚯蚓が岩に干からびる

岩 谷 二三枝

大地の恵みに逆らって太陽のもとに出た蚯蚓の末路は言うまでもなく死である。がそんなことを蚯蚓は知っている筈がない。併し知らず知らずのうちにもそうしなければならなくなつたのは何故なのだろうか、と作者はその干からびたものを見つめている。

漬物がなくて平気でいる世代

馬場 魚山

この句の漬物は福神漬やキューチャン漬の



一歳の恋人

不二田 一三夫

狂わせる

不二田 一三夫

この句を白柳さんからスゴクほめてもらった。これは本年四月号に出た句だが、その四

ことではない。本当の漬物の味はそれを食べて育ってきたものでなければ知らないであろう。故郷の味、おふくろの味、そして食通の喜ぶ一夜漬の味、そうしたものがまわりから消えてゆくのを惜しがっているのは作者だけではない。

美容師に十二神将の髪かたち

村上 春巳

十二神将というのは薬師如来のけん属で、行者や供養者の守護を任とする天部像で、宮毘羅(くびら)外十一将のことだと百科事典にのっている。自分の髪でないものを上の方へくるくるとのつけたのがこの仏像の頭によく似ているというだが、パーマ自体がおしゃか様の頭にそっくりなのも面白い。

四捨五入すればあなたも処女の内

原田 輝親

コンマ以下四捨五入は小学時代に習った算

月号に拙句が「秀句鑑賞」に一句拾われているので、「一歳の恋人」は五月号の「秀句鑑賞」には出ないだろうと、葉子さんは云う

「ボクは出るとおもう」

「コーヒーを賭けましようか」

ということになった。結果はボクの勝ちとなり、コーヒーをおごらせることに成功したが、路郎賞の候補作には五人の選考委員から

数にあったが、このごろのSEX感では一度や二度の交渉はコンマ以下に扱われるのかも知れない。だからあなたも、とは恐ろしいことである。これが昭和元禄とよばれるユエンかも知れない。

習字より落書の文字ほめられた

藤本 恵子

看板は弟子が書いたか書道塾

石倉 旅風

文字はその人の性格をあらわすものだという。手をとって教えてもらった字よりも、書きなぐった字の方にその性格があらわれるのは当然のこと、教えるということはその美点をのばすことでなければ意味がない。歪められた教育ということに鋭い批判をこの句から感じさせられた。

はシャットアウトを食った。(だいたい選というものはこうしたものである)

一歳の恋人は外孫だが、両親の旅行中はボクと寝るし、ボクさえおれば両親を恋しがらない変わりモノである。彼女はボクにセンセン(先生)とよぶ。おじいちゃん云わないうとこが可愛い。(カットは、マル打ってチョン……で描いた、一歳の恋人の作品である)

梨

阿 万 万 的

梨のうち、長十郎は一個の目方が250gにもなり多産系でつくり易いが、肉質があらく硬いのが欠点。

その点二十世紀は肉質もやわらかくみずみずしいが、黒斑病と云う病気に弱い、何かしら美人薄命と云う感じに似ている。

ところがこの梨、同種のもの花粉ばかりではうまく受精しないと云う気むずかしい性質を持っている。そのため人工授精方式がさかんになり現在では花粉銀行が出来ているとか……

ママさんの移り氣店をまたいじり

ハ エ

殺虫剤を撒いても蠅はなかなかいなくなる、そこで最近考えられたのが不妊剤と云う薬品人間様の断種によく似てござる……

V.
こいつを食品にませてハエの集まるところへ置いておくと、これを食べたハエは一見して元氣そうだが薬のききめで子種のないオス

が出来ると、そしてこの野郎と交尾したメスは無精卵を生むと云う寸法。

この方法だとオスは殺しては駄目、子種のないオス。いわゆるプレイボーイ君はなるべく生かして、出来るだけ多く交尾させるのが効果的である。

今のところ完全に成功とは云えないが実験の結果アメリカの牧場あたりでかなりの効果をあげているそう。

科学する心不粹なこともする

鮭

さけ(鮭)は自分の生れた川へ帰る。いわゆる母川回帰性と云う習性がある。

はっておけばいいのに科学者はこいつにメスを入れて見たくなって、或る時何も知らず

川柳塔柳箋

一冊 六五円
送料 三五円

に帰って来たさけをつかまえて、鼻づまりとめくらになるよう残酷な手術をほどこして海へ返した。そして半月後、めくらのさけは十尾中四尾がつかまり、そのうち三尾は元の川にのぼっていたが、鼻づんばさんは、どこをどうさまよっているのか、とうとう元の川へは帰って来ず、その行動はまるで、でたら

カラー表紙・十二月号発売中

秋田実主宰・不二田一三夫編集

月刊「漫才」

発行所

大阪市生野区勝山通六ノ七九
電話大阪(七一八)三二一八

定価 百円
送料 六円

めとなっていた。

人間様より嗅いに強いのは、犬だけではなさそうだ……

みそ汁の匂いしみにみ故郷おもう

貯 蔵

果物や野菜にC・A貯蔵と云うのが行なわれている。このC・Aとはコントロール・アトモスフィアの略である。

これを簡単に説明すると貯蔵庫の中の酸素をへらし、逆に炭酸ガスをふやして果物を窒息させて眠らせてしまふ。こうすると、十月頃に採ったリンゴが翌年の夏でも酸味や香りに変化がないと云う。

よく眠れ、眠れば若さが保たれる……

何かのコマーシャルにでも出て来そうな文句である。

貯蔵の最適は

酸素3% 炭酸ガス2〜3%

温度 90〜95% 湿度0度

青春の特権日曜日の朝寝

昭和四十四年度

川柳塔社同人総会

(第五回)

ことしも44年度の二賞発表に先きだつて、第五回川柳塔社の同人総会がアベノの以和貴荘和室大広間で開かれた。

会場正面に式次第が書かれてある。

第五回川柳塔社同人総会式次第

司会 西尾 栞

開会の辞

代 若本多久志

議長選出

川村 好郎

経過報告

会計報告

役員改選

本年度事業計画

質疑応答

閉会の辞

生々庵主幹の公用で多久志氏が代行し、議事がすめられる。

本年は賛助会員制を設け、同人の協力が大きかったこと。または「初歩教室」が小松園氏から恵二朗氏に、「秀句鑑賞」は梅志氏から白柳氏に、それぞれバトンがわたされたが前二氏におとめ好評であること。それから二賞選出に万全を期するため、三回の中間発表をおこなったことなどを川村好郎氏から報告された。

若本多久志氏の会計報告は物価高の前に立たされた雑誌の姿を、ことまかく説明され、値上げのやむ得ないことをのべ、過半数以上のご賛同を得た。(この時、生々庵主幹が出席)

役員改選を主幹から問われたが満場一致の拍手で現役員はそのまま留任となった。

ここで、副理事長を若干名追加して理事長を補佐すること、参事三名も追加してより強力に固める案も満場一致できまつた。(参事・服部十九平氏逝去のため)

新参事はつぎの三氏である。

倉敷市玉島川柳会々長

岡山県邑久町白百合川柳会顧問

岡村久志良

和歌山市和歌山短詩型文学クラブ主宰

中筋 三幸

好郎氏が本年度事業計画を、生々庵主幹は質疑応答にそれぞれ立たれた各氏から適切な意見が提案された

恵二朗氏「雑誌の値上げはやむ得ないが、おもしろい記事で値上げ分をうめてほしい」

半休門氏「マンガを入れてはどうか」

静水氏「新人にもスペースを」

久志良氏「静水氏が投句用の柳箋を一定の型にせよと提案されたが、

みんな分かっていながら実行してくれないのにはこまる」

西尾栞氏の閉会の辞で、実になごやかに本年度の同人総会が四時三十分におわる。

出席―北川春巢、山田季賛、古川鶴声、荻野鮫虎狼、阿万万的、村田瓢太、垂井葵水、岸作太郎、橘高薫風、神谷凡九郎、西尾栞、中島生々庵、田中狂二、清水白柳、山内静水、池田太郎、池田あや子、国弘半休門、川村好郎、浅川八郎、不二田一三夫、小川恒明、宮地双葉、加藤貞山、菊沢小松園、本田恵二朗、岡本久志良、傍島静馬、正本水客、児島与呂志、菊田いさむ、香川酔々、金井文秋、竹中綾女、若本多久志、吉田圭井堂、大坂形水。

金露

味をの味を
支える
清酒

キンロ

金露酒造株式会社

ダン
ス

石居高志選

ホームバー妻にダンスを教えられ
スマートになりたいダンス熟をあげ
ダンスぐらい知らなと今更娘に習い
仮名文字が流れるようにフラダンス
ツイストに呆けて故郷に近寄らず
ダンスから二人に恋の花が咲き
社用族どこで覚えて来たダンス
古典派と見られるダンスにある優雅
頼りないダンスに一家支えられ
ゴーゴーを踊る社長は三代目
手を組まず踊るダンスで物足らず
お座敷のダンス社長にざるがいり
高原の篝火ダンスの輪で更ける
吐息して見ているダンスコンクール
久々のダンスへ足がついて来ず
ゴーゴーも踊る器用にお茶もたて
職場でのダンスドライな娘がリード
フオークダンス顔赤らめる恋心
大学祭ダンスへ女性の稀少価値
ゴーゴーを真似て腰骨たがわせる
ゴーゴーで結ばれ喧嘩の多い日々
ステップも軽し昔にとった杵
無重力ダンスのような歩きよう

里風
魚山
勝子
可住
初甫
肖二
鱗魚
百水
静歩
素身郎
新之助
利美
軒太樓
隆子
孜孝
誓二
保夫
不二
瑞枝
輝親
思月
双楽
英詩

ダンスから知り合い銀婚無事に済み
社交なると夫のダンスに目をつけ
好きな娘が踊りダンスをやめられず
PTA スクエアダンスへ気が揃い
リードする筈のダンスをリード
フラダンス孫三人のブレイゼント
何時の間にか娘ダンスの銅メダル
外交官に惚れてダンスを習い初め
ダンスなら委せと音痴立ち上り
駆け出しのダンスお化粧も習い
フラダンスまで出て宴会派手に
ダンスでもやれる明治で親しまれ
ダンスにも金のかかった踊りよう
パーティ券踊れぬ俺へ売りに来る
キャンプファイアフオークダンスに星が降り
踊つて肩越し送るラブサイン
老骨を鞭打クイッククイックスロー
ゴーゴーへ踊る阿呆で挑戦す
ラストバンドへ女心も身も崩し
ただくつついて休んでいるダンス

五 客

琴も弾けダンスも出来てケバを持ち
パパとママフオークダンスを手握り
次男坊ダンスのうまい嫁が来る
同窓会ダンス上手な嫁き遅れ
家庭教師ダンス教えてくびになり

人

素身郎
芳子
藤波
征山
佳女
忠志
トク子
章雅
同
扇水
同
弘朗
同
一進
同
芳仙
同
七面山
同
桃路
同
宵明
富子
虹要

養子

磯野与志選

とりもつたダンスも遠く世帯染み
光枝
天
案内の人がダンスヘツイと立ち
古方
軸
ゴーゴーを踊りゼーゼー息を吐き
養子
磯野与志選
クラーもステレオも置養子待、和宏
易の灯に養子が出来ぬ愚痴を云い
恵子
養子貰う心淋しく娘の仕度
道雄
本人に聞かず断る養子口
章雅
養子先やつぱり案じる子沢山
トク子
む養子決めて都会の娘が帰る
忠志
養子にはせぬがんばりの寡婦の汗
柳子
御手本のような養子でものたりず
ひで子
恋故に不本意乍ら行く養子
止水
学資金婿にする気で出して居た
泰嗣
それじゃ養子かと名刺見直され
露声
貰い子つてほんとなのかと走り込
光枝
物価高いつそ養子に行つたらか
芳子
親の夢叶い今宵の婿養子
富子
けとばして欲しい勇気のない養子
桃路
珍客に姑も養子の顔をたて
軒太楼

篤農の家に養子の落ちつかず

子が出来て今度の養子腰を据え

田畑があり過ぎ養子来てくれず

家元の家名養子でつなぎ止め

息子より店は養子に継がす腹

いとほんと呼んだ昔がある女房

婚家を盛り上げて養子憎まれる

残業を買ってでもする婿養子

男子出生養子面目躍如たり

嫌われて好かれて養子株を上げ

へべれけに酔つて養子の見せし夜

殊更に養子上座に坐らされ

出て行けと云えぬを養子齒痒がり

言い分もあるうに養子静か過ぎ

義父さんと同じ名前でもごつかせ

出来た妻夫を養子と気付かせず

不憫な子思えば養子にやれもせず

酔い覚めへ養子あんなに慌てよう

二次会へ養子は忍者の如く消え

悪くても良くても養子だからに

人

ドル箱で居ても養子というひけ目

地

落ちつて養子へボツボツ穴が見え

天

おかあさんどうやら養子つなぎ

軸

養子なお故山へ一朶埋めたく

夕刊

早川清生選

水を打つ父夕刊を立つて読み

夕刊が教えて呉れた故郷の事故

終電車夕刊紙から起こされる

通勤車夕刊乗せて往復し

病床のたいくつ夕刊届く頃

夕刊の天気予報で旅にたち

夕刊へテレビの欄だけ見てる妻

サンマ焼く匂い夕刊腹が鳴り

夕刊へ関心うすい過疎部落

夕刊のすみに心中した母子

ギャンブル欄多い夕刊駅で買い

夕刊を読みつぶして居る独り旅

朝刊で刺し夕刊で逮捕され

夕刊に子の事故多い夏休み

夕刊にひかれ返事もしてくれず

夕刊を丹念に読む妻の留守

台風は夜中と書いてある夕刊

夕刊を拾うて車掌交替し

夕刊を読み直しする昼弁当

夕刊がこんなに遅い子を思い

夕刊を読む間も残業料がつき

夕刊の記事に誤植の多過ぎて

夕刊を開けばどこかにあるスード

夕刊は靴の中で朝となり

夕刊の立読み夕食の当がない

夕刊によればスターが蒸発し

夕刊を隣で借りる用が出来

夕刊に一部既報と市内版

朝刊の善意夕刊での疑惑

夕刊で褒め朝刊で敗けていた

夕刊でせんじ薬の名を覚え

読み捨ての夕刊女のようにからみ

夕刊で見た求職へ靴を履き

売れ残る夕刊に秋の日は早い

団樂の笑い夕刊取りに来ず

佳

夕刊を鍵つ子大事に持つて待ち

夕刊二銭宮本武蔵読んだ頃

夕刊の子はうちの子と同じ歳

台風接近夕刊一寸ずつちがい

斜陽赤赤新聞の子の影長く

人

代仕男

保夫

曉明

藤波

七面山

露声

雪二

柳子

扇水

魚山

桃路

扇水

藤波

芳仙

祥月

伶人

葵水

古方

弘朗

白汀

久情

初歩教室

題

「祈」

本田 恵 二 朗

人間の弱さを知つた日の祈り 弘生
弱さを知つてこそ、強くなれるのではなからうか。この祈りは、貴重な反省であり、飛躍への源泉であらう。

蒔いた種刈るに神さま仏さま 利美
一連の句、好調だ。中でもこの一句は佳吟

つまずきへ母の祈りが流れる 千代
母の祈りが聞えた時、そのつまずきは、良薬に変わった。そして人生体験がプラスされた。

無事祈る母の心に神が住む 慶彦
神が住むとは、よくぞ言えた。精進あれ。

十円玉一つで三十分祈り 綾女
祈りの内容は想像にまかせとけばよい。表現の妙を発見するべく努められよ。

成田さんに新車をとくと見てもらい 隼人
説明調を打ち破る努力があなたの急務だ。直訴するように神前にうずくまり 仙洞
面白い発見だ。この調子で前進しよう。

百度踏む素足の白く秋深む 雅方
こうして格調のある句も、時には生みたい。腹帯に慈母観音を封じ込め 行有

愛情あふれる句は末長く生き続けるよ。

平和への祈り党派を越えられず 和風
あなたの嘆きは、多くの共感を得るよ。

呟々の声祈る鼓膜に突き刺り 誓二
突き刺りとオーバーに表現したところが面白いし、それほどに元氣な呟々の声だったことが判つて、思わずもお芽出度うと言わせる。

観音になにを祈るかはつれ髪 義一
浮世絵を思い出させた。しんみりさせた。

ゲバ棒へ母の祈りが届かない 政夫
問答無用では解決が無い。母は泣いている。

長い道祈る心に助けられ 克枝
祈る心を持つことの出来る者は倅だよ。

お祈りが日課となった長い床 止水
斗病が祈りというものを見つけた。

父となる今日へ灯明絶やすまい 茂美
こうでもせねばいられない父性愛の芽吹きよ

孤独感に押しつぶされそう祈らねば 富子
その祈りから何かを発見せねばなるまい。

旦さんに済まぬ祈りも法善寺 為二
特定の場所を詠み込むのは中々むつかしいが

この一句美事に法善寺を生かしたよ。

幸運が祈る心を置き忘れ 繁子
全く勝手なもんだな。幸運が逃げたら嗚呼。

お祈りに心の柱支えられ 静子
この柱はやがてたくましくなる柱だよ。

神さまは祈る心に住むそうな 肖二
だから祈らう。そして倅せにならう。

送り出す背に無事故と目で描き 満津子
夫への愛情がにじみ出ているよ。

はようなれははようなれと氷割る 秀村
愛児の枕辺で、よもすがら看る若き父よ母よ

すくすくと育てと祈る子守唄 久子
その唄は、少々もげていても構わない。母ご

ごろの強さは偉大であり、尊い。
宿る命を心に祈る日のおんな 静観堂

格調高く詠みあげようとする努力は結構だが
くだけた節まわしも亦面白いのが川柳だ。

みごろうみごもりたいたと祈る夜
こんな調子に焼直すことも出来る句材。

今日の無事祈つてくれる妻ごころ 一二三
心と漢字で表現したのと、こころと仮名で表現したのとは、ニューアンスが違ってくる。

お祈りを捧げて銀杯の良いお箸 光枝
家庭の良さが好ましく浮き彫りされた。

恐山の巫女の祈りの芝居めき 保夫
芝居めきはよかった。共感を呼ぶよ。

欲深い祈りで仏苦笑させ 多幸
苦笑されてるとも知らないで祈り続けている。

無神論者或る日祈つてみたくなり 軒太楼

人間の弱さが時に現れることがあるよ。

お祈りをすませ落着き取り戻し 仲美

悪人でない証拠だよ、おや失礼。

幸あれと放つ小鳩へ天高し 比呂路

雨風に耐えながら、小鳩は強くなつてゆく。

留守役の老体仏壇へなに祈る 芳

こうしておれば退屈しないんだよねえ。

仏壇へかしわ手打つた日の不覚 新之助

老母が見ていたら、どづかれますぞ。

マスコット妻の祈りが窓に揺れ 孜孝

愛妻の祈りがハンドルを油断させないよ。

子の熱へ無神論者が手を合せ すき

思い当る人がそこいらに居そうだよ。

鐘太鼓で祈られ神さんおつたまげ 三十四

いい気持ちで居眠っていたのにうるさいな。

当選を祈られ神さんふと迷い 虎城

定員三名へ立公補五名、神さんも考えあぐね

お賽銭投げたよこつち向きなされ 古平

十円玉一つじゃそつちへ向けないよあんだ。

俸せになれと見上げる高島田 初甫

見上げるその目が濡れている、あわれ母。

交通安全祈つた帰り道ではね 万竿

交通戦争いつまで続くぬかるみぞだよ。

自己本意な祈りへ神さん顔しかめ 頼次

これは赤い鳥居の神さんらしいぞ。

神官に拔かせ知事が鍬を入れ 聖川

これもお役所仕事の一つだ。科学時代にね。

お祈りに幸を見つけた青い空

善意の人の祈りはこんなぐあいになるのだ。

朝参り嫁のおなかは八カ月 生仏

可愛い初孫を待つ心が祈らずにいられない

願かけを神さんうつつかりつけ忘れ 一休

そうとも知らないで、足を棒にしているよ。

ハネムーンへ母の祈りのはてしなく 志津

母ごころは尊いものだ。そして美しい。

陰膳で出稼ぎ亭主祈られる 濁水

縄のれんをやたらにくぐつちやいけないよ。

兎も角も祈つておれば気がなごみ 一登

祈りを知つてるのは人間だけだ。有難し。

合格発表祈る視線が追いかける はぎの

ずらり並んだ名前を追う目が血走っている。

てる坊主祈りを込めて窓に吊る 富士

常任理事会

十月四日、常任理事会開催。同人総会と二賞の授賞に句会が重なるので時間を生かす打ち合わせなど慎重を期し、かてて八時半に閉会とあつて種々検討を重ねる。

いよいよ改題以来四年目なので

人事の刷新なども話題にのぼる。

ややマンネリにおち入っているこ

とは事実である。出席―生々庵、

白柳、好郎、静馬、形水、薫風、

文秋、一三夫諸氏。

子の遠足へお弁当を作っている若い母の顔。

× × ×

あなたの句を、私の舌がなめまわして、ゆ

っくりと味って、私の味覚神経は色々な味を

喫したが、もの足りなさも多分に味わさされ

たことも事実だ。私の味覚神経を無条件でと

ろけさせるような句を、提供して欲しい。

十一月二十日メ切「神」一月号発表

十二月二十日メ切「静」二月号発表

一月二十日メ切「早」三月号発表

岡山県倉敷市下津井三五二

郵便番号七一一

本田 恵 二朗

細川家名宝展

10月1日→11月9日

菊香る宝塚ファミリアランドの植物園ギャラリーを中心に、格調高くくりひろげる美術展です。肥後熊本54万石・細川家に伝わる美術品のうち、国宝・重文、重美を含む三〇〇点を初公開！

宝塚ファミリアランド

大 萬 川 柳

「姿」

入選発表

選 者 清 水 白 柳
 投句総数 七百三十一句
 入 選 五 十 七 句

坂 井 雀 躍 子
 嫁ぐ娘の後姿は母のもの
 大阪 小松園
 電話口こんな姿と思うまい
 大阪 誓 二

身くねらせて鮎婦体のま焼かれ
 大阪 金 三
 これきりで姿見せなと包み金
 大阪 阿 茶

税務吏のうしろ姿へ汗を拭き
 藤井寺 吸 江
 晩年の母に似てきたシルエット
 八 尾 酔 々

タクシーへ袖から入る晴姿
 堺 天 笑
 定年の姿守衛に見送られ
 富田林 花 梢

惨敗の姿ビデオがまた映し
 高 石 好 郎
 整形の顔が敷いている姿
 富田林 弥 栄 子

姿まだ瞳に残る墓洗う
 大阪 あいき
 一城の主の姿屋台店
 倉 吉 弘 朗

イメージと逆な姿に惚れ直す
 堺 千 万 子
 ゲバ棒の学生カマキリに似た姿
 倉 敷 素 身 郎

仲人に働く姿見てもらい
 大阪 慶之助
 神 戸 どんたく

シャッターも一緒に笑う晴姿
 広島 露 声
 羽鳥野 幽 玄

後姿でわかりましたとバーの椅子
 東大阪 三十四
 男か女か前へ廻つてなお迷い
 西 宮 百 酒

待つひとの姿心に描いて待ち
 鳥 取 日 満
 生れたままの姿でモデルさん儲け
 大阪 雅 万

名も告げぬ後姿へ手を合せ
 大阪 痴 亭
 割烹着姿の妻がいつち好き
 大阪 与 呂 志

姿だけ見送る駅の曲り角
 倉 敷 恵 二 朗
 影の方がよつぽどスマートだよ君
 倉 敷 扇 水

晴姿努めて標準語を使い
 岐阜 鱗 魚
 本当の姿で母がねむくなり
 大阪 久 情

これ以上変えようがない三面鏡
 大 洲 曉 明
 四五日で山の姿を変えたブル
 倉 敷 十 四 雄

寝姿も血は争えず親に似て
 神 戸 どんたく

欠陥車みたいに姿だけの人
 姿より心と我を慰める
 貝 塚 つき子
 超ミニだパンタロンだわたし忙しい
 デートの日なんでも鏡にしてみたい
 八 尾 鬼 遊
 悪口が後姿を確める
 お化粧も後姿に年がばれ
 高 槻 静 馬
 テープ切る姿男に見せられず
 デパートの鏡に貧相な俺がおり
 大阪 水 客
 風船も朝の姿になり果てる
 倉 敷 千 翁
 見覚えをうしろ姿に考える
 人を呑む姿ではない山が映え
 大阪 柳 志
 斗病の姿にするまで治り
 見合いより働く姿気に入られ
 たつた一べん姿見られている弱身
 佳 句
 父の名で後姿を呼ばれたら
 大阪 野 迷 路
 逢えなんだ姿を駅の隅に置く

票 一二三
いじらしい恋後姿を見てるだけ

大阪慶之助

倅せな頃を写真屋まだ飾り

倉敷克枝

背き去るうしろ姿がくれた意地

人ノ句

倉敷十四雄

小豆撰る姿も老いの幸のうち

鹿兒島 トク子

在りし日の父の五十はわが姿

天ノ句

大阪生 学

日本の姿に似たりおもちゃ箱

選者 吟

天気予報明日の姿としてうつる

大萬川柳四十四年度(第十回)

ベストテン(十月現在)

一	柳 志	大阪二〇、〇
二	瑞 枝	米子一八、〇
三	天 笑	堺 一七、五
四	好 郎	高石一七、五
五	克 枝	倉敷一五、五
六	水 客	大阪一四、五
七	鱗 魚	岐阜一三、五
八	文 秋	大阪一三、五
九	花 梢	富田林 一三、五

十 小路

大阪一三、五

十一 千代

米子一三、〇

十二 慶之助

大阪一二、五

十三 利美

尼崎一二、五

十四 素身郎

倉敷一二、五

十五 小松園

大阪一一、〇

十六 阿茶

大阪一〇、五

十六 十四雄

倉敷一〇、五

十八 一二三

堺 一〇、五

十九 静馬

大阪一〇、五

二〇 曉明

大洲一〇、五

二一 恵二朗

倉敷九、〇

二二 弘生

大阪九、〇

二三 千翁

倉敷九、〇

二四 久米雄

岡山九、〇

二五 里風

倉敷九、〇

二六 吸江

藤井寺九、〇

二七 形水

大阪九、〇

二八 素郎

堺 九、〇

二九 葵水

和歌山八、五

三〇 鬼遊

八尾八、五

以下略

ベストテン第一位から第三十位
以下も僅少の差で競い合っています。
す。愈々最終回が逼っている。ラ
ストヘビーを掛けましょう(好)
昭和四十四年度第十二回(最終)
「斜め」 五句以内

締切 十一月二十日

昭和四十五年第一回

「脈」 五句以内

締切 十二月二十日

投句先

大阪府高石市高師浜三丁目五一六

郵便番号 五九二

川村 好郎

★

★大萬川柳あれこれ

「川柳雑誌」時代、梅里さんが
路郎先生へ句箋を持ってこられた
日はすぐわかった。大抵その場で
選をされるので、梅里さんが帰っ
たあとでも、

「どうも、きょうの天は好郎郎
かった」とか、蔑乃先生と話を交
わされているので、印刷所から校
正に帰ってきてても、選の済んだこ
とがすぐわかったものだ。

ボクもその頃はガン張ったもの
である。名手好郎、水客、潮花、
豆秋といった人たちの「味のある
句」にいつも苦杯をのまされてい
たし、またこの人たちは、かなら
ずベスト10に名を連ねていたの
で、なかなかこの先頭グループの

中へ割りこむのには相当の努力が
要求されたものである。

「不二田さん、頑張りなさいよ」

と、蔑乃先生はいつもお尻をたた
いてくださった。

当時、敢闘賞というのがあって

新人でベスト10にはいると賞品が

出ていた。ボクは幸運にも初っぱ

なからベスト10にはいったのに、

「お前は新人ではない」と、梅里

さんは賞をくれなかった。「ほん

とくに巧いといえは、好郎かな

——と、路郎先生は、好郎氏を

高く買っておられたようだ(F)

営業所

阿倍野店

堺吉店

住野店

平野店

都島店

今福店

十三店

九条店

crcdit system



越丸

本社 大阪市阿倍野筋3-15-1
TEL 632-3806 3807

良い買い
安い
月賦百貨店

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼麻生霞乃先生は、最近服薬も中止して、身体の調子も良く元気にしておられる。十月初旬、久しぶりの西村梨里さんの来訪に大喜びされ、お孫さんと生駒山上まで登って、秋の快晴の一日を楽しく過された。梨里さんもますます忙しくしておられお元氣である。

▼平安川柳社六作家選暦のついでが十一月二日(日)午前十一時から京都市下京区西洞院通六条上ル東側、緑風荘で開催。池田麗水、伊藤入仙・西沢青二・田中秀実・山中基八・東滋郎の六氏を祝い模擬店による懇親会がある。関西川柳作家懇話会協賛。

▼第二回柳都文化祭川柳大会は十一月九日(日)正午から新津市本町二老人憩の家で開催。兼題・ブーム・放送・核家族・ひと言・挑戦・菊・拒否、各題二句、

投句は十一月五日までに新津市新栄町山田加勢夫宛、投句料無料。

▼小樽川柳社「こなゆき」二百五十号記念誌上川柳大会は、第一部、雑詠(各選者宛二句)堀豊次・大野風柳・佐藤正敏・磯部鈴波・直江武骨、第二部、長い・ふくらむ・猛烈・雑音・女神、(各題二句)、十一月十日までに投句料百円(発表誌希望者百円追加)封入の上小樽市花園三丁目小樽川柳社へ。

▼名古屋まつり協賛第二十回名古屋短詩型文学祭作品展は十月十二日から十九日まで教育館ロビーで開催された。また文学祭大会は十月十九日所で文化講演、受賞式などが行われた。

▼秋の雀郎まつり川柳大会は九月十四日宇都宮市くろかみ荘で開催された。

▼第七回東北北海道兼オホー

ック二百号記念川柳大会は十一月二日(日)正午、北見市中央町三〇北見公民館ホールで開催。

▼第三十九回京浜川柳大会会報が八月十五日くろしお九三号付録として発行された。

▼第七回垂天賞が川柳人四五〇号で発表され、「算盤をはじき平和を出し惜しみ」の句で大石鶴子さんが受賞になった。

▼せんば川柳社の月例本社句会の日取りと場所が十月から変更になった。毎月第三土曜日、(但し十五日に当る月は翌十六日)南区河原町一丁目(旧大劇前を南内へ丁西側)金比羅神社境内で開かれる。

▼北海道川柳名鑑第二版が八月十五日北海道川柳連盟(札幌市白石町南郷通十二丁目南四十九)から発行。塩見一釜編A5版七一頁、定価三百円送料四十五円。

▼八木摩天郎著「堺の川柳散歩・堺古詩藻集」刊行(三一頁参照)。

▼野口自楽人著、自筆句集「一粒の米」が十月十日東京府府中本町二の二の一から発行になった。山路関古氏の序と川上三太郎氏の

序文に替えてのサインがある。俳句、都々逸をもたしなみ、書画骨董なども多趣味の人で、関東大震災前後には、自楽人居は東都柳人のクラブが定着、たまり場の観を呈していたという。その人柄が如実に出た句三百三十五句が収められている。自筆句百冊の製作は書重な本となるだろう。「一粒の米人生の上にあり」。

▼どんぐり川柳会、丸紅飯田川柳会、あすなろう川柳会合同吟行は九月二十一日午後一時からあやめ池魚国クラブで開催。

▼阿達義雄、下村梵共撰俳諧武玉川要抄(附「柳多留拾遺」代表句選)が新潟市船江町一丁目六二武玉川研究会から発行された。学究と作家の共選は個人的好悪に片寄らぬもので、「風俗文化研究や国語の含蓄性」ある四百句「文芸価値」主眼の四百句を合せて、武玉川研究の資となる一冊である。頒価送料共百円。十一月中配本。

▼第五回山陰川柳大会は九月二十一日(日)新装の東伯町中央公民館で開催、総合優勝は八木千代(米子市

準備優勝に村松静歩氏(松江市)、第三位は今村夕路氏(赤崎町)、特別課題吟秀句に岡本きみえさん(松江市)の句が選ばれた。

▼川柳塔松江復活一周年記念、勝谷山川児を偲ぶ会は九月二十八日なわ本館で開催。緑之助・柳慶・弘朗・明朗・酔歩の諸氏ら多数が出席された。

▼大井正夫川柳色紙展「姫路点々」が十一月一日から十五日まで姫路市大手通り田中屋喫茶一階画廊で開催される。他に柳人の友情出品もあり成功をお祈りする。

▼東野大八氏(美濃加茂市)は十月八日から仙台へ。九日は松島から中尊寺に向い松並泊り。瑞巖寺では伊達正宗が眺めていた能の面を十幾面も見えて誠に結構な思いをされた。西行の色紙もありました。

▼石原青竜刀氏(東京都)はせんば九月号に、さきに出席された路即念句会の模様を「今夕の句念にはユーモアの句が多かったことを心強くおもった」といふにこの面での進展を希望しておられる。云々」と書いてお

▼本田恵二朗（倉敷市）・岡本久志良（岡山県）両氏は十月十二日の同人総会・本社句会に出席の夜、浜寺の中島生々庵居で一泊、翌十三日恵二朗氏は中島診療所で好郎・白柳・一三夫・葉子の諸氏と歓談された。▼池田太郎・あや子さん夫妻（岡山市同人）は十月十一日姫御さんの結婚式に大阪。翌日の同人総会、句会に出席された。▼岡村久志良氏（岡山県同人）は小橋のぼる氏と谷川渥子さんの令嬢との結婚の仲人をつとめられるので、同人総会の翌十三日早朝大阪駅発、帰岡式場へ向われた。▼川岡靈眼子氏（諫早市同

人）は、十月十二日から四日間上京、帰途空路伊丹へ降りられたら本社を訪問される。佐世保での長崎夏季スポーツ大会での美智子紀殿下のお人気が素晴らしく氏も拝顔された由。「妃の宮にたかる諸列の人の波」▼渡部曉童氏（愛媛県同人）から、「九月十日からの高知市での四国公民館大会に参加しています。中沢濁水氏のこと、竹内機見女さんのことなど、加減でか昔の事ばかり思い出されます。近頃は川柳の旅でなく仕事の旅ばかりでちと淋しいです。」▼山田季賛氏（高槻同人）の職場、山陽新幹線工事も、大阪新幹線工事もと改

新同人紹介

島野大 吉
西野 吐 来
有 信 新之助
白柳・梅志推薦

名、九月始めに下関工務局から百二十名転属、工事は本格的に進みつつあり、用地売却、埋設物の支障物移設の設計協議など多忙の毎日を送っておられる。▼樋口舟遊氏は十月二十六日の奈良市白藤学園会議室での「葦の会」五周年の集いで、兼題「鳩」の選をさした。伊藤定子・坂根寛哉・森中恵美子・瓦本ユキ諸氏の選で若さ一ぱいの会であった。▼若柳潮花氏（高槻同人）は秋にはいつて舞台が忙しくなり、プロのきびしさをひしひし感じられている。

▼松川杜的氏（京都同人）はみちのくから旅信湯の香とこけしみちのくの旅案し杜的。▼藤本磯山氏が主宰するふじかげ短詩睡会川柳部の四年の成績順位がきまった成人部では藤本佳女さん、小中学部では藤本恵子さん▼伊藤茶仏氏（本社参事）小松市社会福祉協議会長に社会福祉功労者の一人として藍綬褒章を賜ると、十月四日厚生省から発表された伝達式は十一月十六日厚生省において行なわれる。同氏は多くの社会事業に関係し、これまでも数え切れない程の感謝状、表彰状を授けて、一貫して社会福祉事業に打ち込んでいる人である。▼馬場魚山氏（小松同人）神経障害で歩行不自由のため十月八日金沢市の金沢大学附属病院内神経科五病棟四階四〇三号室へ入院した。▼高杉鬼遊氏（八尾市同人）のご子息が十月の本社句会で月間賞・ライバルがわが子となつてうろたえる「鬼遊」。

●けんじ出資。兼題「ラッジュ」から、栗、千万子、大吉、天笑、つき子、弥生の皆さんの句である。▼橋高薫風は十月八日から

疲労 肩こり 神経痛 食欲不振
アリナミンA

▼林夢虹氏（豊中市同人）は十月十日紅葉の上高地へ焼岳のかすかな煙にホレブの山を偲ぶ、穂高の登頂に快哉を叫ばれた。「岩頂を犯させず焼岳煙吐く」▼不二田一三夫氏作、ラジオ大阪の「奥様コーナー」へ。十月本社句会の入選句が放送される。十一月六日午前九時三十五分、はんじ

▼後藤梅志氏の全快祝いをかねた出版披露の会が十月十八日開催、盛会だった。

路郎賞 川柳塔賞 発表句会 (五時三十分)

10月12日 会場 以和貴莊大和室

会場、以和貴莊大和室の窓ガラスが秋の陽に映え、床の間の黄菊白菊の前で、路郎賞・川柳塔賞の楯がサンと輝くところ、待望の二賞授賞式が刻々と近づく。

生々庵主幹から路郎賞と川柳塔賞の記念品と賞状が、恵二朗氏や紫さんはじめ皆さんにわたされ、主幹は選考の苦心などを語られた。

——会場をゆるがす拍手が鳴りっぱなしだ。

遠来の本田恵二朗(倉敷)、池田太郎、あや子(岡山)、岡村志久良(岡山)、荻野鮎虎狼(岡山)、国弘半休門(山口)、山内静水(竹原)、王紫(出雲)諸氏をはじめ、ふ

あうす川柳社、せんば川柳社の方々から、墨作二郎、定金冬二氏という著名作家の友情ご出席もあり、近來にない二賞発表句会にしていたことはありがたかった。

ただ残念だったのは、この会場が八時三十分までより使えなかったことである。幹事は時計にとらめつてで選者諸氏をせきたてる。申しわけない——。

句箋三百を三十分内外で選をしていただく

強行時間など、非情なスケジュールだった。

いつもと違ったことは、主幹の手に残る六句のほとんどが常連ではなかったことである——これはいい傾向である。

なかにもワッとわかせたのは、鬼遊氏のこ

子息力氏が月間賞をかつさらったことだ。この年少作家へおくる拍手がまたスゴかった。

鬼遊氏は昨年の川柳塔賞作家であり、この育て親である好郎氏の得意顔が印象的だった。

川柳一家鬼遊、千歩さん、おめでどう。

(F)

(河井庸佑整理)

出演——白柳・静水・太郎・あや子・半休門

・好郎・一三夫・八郎・恒明・双葉・貞山

・久志良・恵二朗・小松園・静馬・水客・与呂

志・多久志・いさむ・栞・静々・文秋・形水

・勝晴・照江・武助・大吉・生長・柳志・花

梢・桃路・肖二・庸佑・儀一・虎声・一舟・

静歩・千万子・茂美・功雄改め修史・言也・

喜風・古方・天笑・誓二・柳太・凡吉・笑痴

・富久一・維久子・トメ子・圭井堂・鮫虎狼

・春果・季賛・鶴声・万的・瓢太・葵水・作
太郎・薫風・凡九郎・綾女・狂二・紫・生々
庵・鬼遊・力・立馬・一峯・葛城・眉水・新
之助・阿茶・滋雀・操子・幸代・つき子・君
子・あいき・智子・一二三・史好・河産・藻
介・禎三・夢成・作二郎・冬二・葉子。

席題「和室」 山内静水選

鍵かけて和室の中の白昼夢 静歩
肩で泣く後ろ姿も日本間 小松園
転宅の和室は母と妻のもの 鮫虎狼
お座敷のムードが酔わす四畳半 茂美
一と間だけ畳を敷いて親日家 恵二朗
母連れた旅は和室の宿を選び 一三夫
和室もう匂うばかりの沈丁花 静歩
和室二間ぶちぬく今日の金屏風 栗太
お馴染みは奥の和室の隅で飲み 柳太
くつろいで貰う和室をよろこばれ 藻介
和室ムードに変えて飲み屋の冬仕度 万的
会長の好きな和室にして貰い 藻介
椅子を置く和室に年よになじめない 眉水
ピアノ科を出た嫁和室が気に入らず 生々庵
生活のリズムは持たず四畳半 小松園
菊匂う和室に喪服似合う人 一三夫
冷暖房完備の和室の窓に富士 弥生
日本酒置の上なら酔えそうな 眉水
スカートのひざを抑えている和室 笑痴
すき焼の会へ和室があいていず 春果
和室にも応接セットのある暮し 葵水
耳打ちは和室に用意出来てます 久志良
お茶お花お琴茶室も建てました

碧い瞳の和室へ白菊咲き乱れ 静歩
団地サイズの和室に軸をもて余し 一二三
イブニングドレスがしおらしい和室 富久一
抽象画和室にかけてあぐらかき 阿茶
ダブルベッド置いて和室のむこう事 生庵
旅たのし宿に梅の間桜の間 眉水
洋風化させた和室は娘らの城 君子
新築の和室は父母のおわします 静水

席題「マンガ」

岡村久志良選

時事マンガ社会の裏をつまみ出し 大吉
四コマのマンガが政治料理され 笑痴
立読みのマンガへ笑い高すぎる 鬼遊
演壇へマンガにされる顔で立ち 天笑
良いパパでありたい願ひ見るマンガ 凡吉
マンガの読み過ぎ漢字に自信ない つき子
出口まで笑いとまらぬマンガ展 言也
マンガだなあと思うピエロの父と 富久一
ご近所の世話うマンガのような妻 与呂志
ゲバ学生のアイドルとなるカムイ伝 万志
世渡りのコツをマンガに教えられ 言也
少年の夢がマンガへ逆立し 静歩
現実がマンガのビジョン追っかける 一峯
大学の街でマンガ見るゆとり 貞山
マンガ読む目と先生には判り 滋雀
マンガにも派閥があつて硬と軟 花茶
マンガ見る顔に邪気はなかりけり 阿梢
マンガにもならぬ男ではつとかれ あや子
小半日マンガの不徳気にならず 水客
失言の首相マンガで叱られる 柳志
黒板のマンガきつちりノートする 古方

マンガむきの顔でエリートコースを 失名
サザエさんみたいいうちのお母ちゃん 静馬
二十年先のマンガが笑えない 静水
マンガに画かせマンガ大物いてくる 静水
三面で泣かせマンガで笑わされる 柳志
マンガ見るときは寝転ぶことに決め 葵水
マンガ本頭の体操だとぬかし 春果
子どもの靴にも踊っているマンガ 柳太
ひざボンとたたきマンガにある風刺 介
シルエットマンガ本とはママ知らず 藻介
塗るうちに女マンガの顔になり つき子
助教授のある日マンガにとりつかれ 好郎
もうこんなマンガが判る子に慌て 一三夫
五千年の夢をマンガがのぞいてる 葵水
笑えないマンガだゲバ棒ヘルメット 静歩
毛語録読みマンガ読み火炎ビン 惠二朗
マンガ 汎 濫 僕 も 主 人 公 形 水
マンガのような人生なら素晴らしい 凡九郎
鈍子一本マンガがみてもならぬ顔 智子
見出しとマンガだけが朝をうる 水客
二三日たつてマンガにくすぐられ 榎一
弱い父ばかりマンガで描いてくれ 富久一
父性愛たかマンガに泣かされる 藻介
大臣の不機嫌今朝のマンガから 力
久志良

兼題「幸運」

本田恵二朗選

幸運は幸運な人に拾われて 正朗
石橋を叩いて幸運取り逃がし 清子
膝頭また幸運の逃げた音 凡九郎
デボチンの艶で幸運受けとめる 天笑
ブラジルの伯父とやらから来た遺産 静馬

月を踏み月から帰る幸運児 維久子
浪人の眼に幸運な顔ばかり 文秋
気まぐれの幸運あつちむきこつち 阿茶
幸運な方々と通夜で囁かれ 笑痴
幸運と背中合わせに居た不運 滋雀
急病へ医者が乗ってた連絡船 花梢
金婚式幸運じつと噛みしめる 春果
幸運がそもそもけちのつきはじめ 瓢太
幸運の素顔よくれた紙幣だった 野迷路
ただ幸運と多くを語る 八郎
幸運をはこぶ封書も十五円 天笑
幸運も積んで嫁ぐ荷見送られ 多志
ライバルが幸運つかんだ日のあせり 君子
幸運のホクロが大きい被告席 白松園
師の影を踏む幸運の中に居る 白柳
速達へ朝の笑いとまらぬ 静歩
晩運は易のとおりに路郎賞 久志良
ぬれ手で栗つかんだように言う他人 静馬
幸運はゆつくり不運は急ぎ足で来る 紫
幸運に恵まれ我れを忘れかけ 生
先見の明も努力も運にされ 好井堂
幸運におぼれて道を見失い 夢成
ある幸運悲劇の序曲が始まるぞ 凡九郎
幸運か不幸か親の七ひかり 瓢太
ナァおいナァおい誰彼となく喋り 与呂志
歯車かみ合わず幸運ころげ出し 一三夫
あか切れの手へ幸運の使者が見え 太
幸運をつかんでしまえば語らない 桃郎
びつくりしなやと幸運知らされる 柳路
幸運のつづく背筋がふと冷える 一
幸運は無欲な人が好きと見え 峯

「雅号ぶっちゃけばなし」(74)

のだ



野田素身郎

す
み
ろ
う

昭和二十四年十二月から復刊した山陽新聞夕刊に路郎先生選の「山陽川柳」が掲載されはじめた。これに投句しようと思いつけたのが、素身郎である。句よりも先に雅号を考えたとに思う。そして、はじめて活字になったのが、翌二十五年四月のことである。

本名(純男)のように(すみお)と呼んでいたが、かつたが、いつのまにか「すみろう」になってしまった。しかし、今では、その方がよいと思っている。

素身郎の「郎」は、路郎先生から無断拝借したものである。

地方公務員(三十九歳)

幸運が続き手相を見て貰う
運向いたときは人生黄昏れる
買った値の百倍ほどに土地が売れ
幸運のかぎはこの子にぎってる
幸運と言え笑顔の一票差
幸運を働く汗の手でつかみ
幸運です満足です夫の寝顔
長病みを見舞い幸運噛みしめる
全身のふるえ止まらぬ穴を当てる
遭難の模様を語る生き残り
幸運と言おうが家に対話あり
ひとさまのお世話が出来るように
幸運を雲の峰から授けられ

兼題「ラッシュ」

若本多久志選

カーラッシュ交通至便を嘘にする
スリの手が吊皮持ったままラッシュ
ラッシュアワーそれでも恋を売ら
吐き出され押込まれつつ梅田迄
混み合ってすみませんとは空々し
恥しや掻き分け走り乗る同車
なれそれはラッシュで足を踏んでも
産みゆけお腹ラッシュにかばい
ラッシュにも馴れて通勤読みふけり
先輩のバイトに押され乗るホーム
大漁の網へラッシュの朝思う
ラッシュ嬉しまさに唇ふれんとす
古タイヤのような私にしたラッシュ
母と子の手はしつとラッシュアワー
緑日の賽銭見当つけて投げ

誓二 狂二 恒明 葛城 鮫虎 子メ子 芳子 日満 虎城 どんたく 富久一 文秋 半休門

山の幸八百屋は秋のラッシュなり
恋人のことも忘れているラッシュ
ラッシュアワー幹事ひとりが乗る損
ラッシュアワー他人の肩のつたき
ラッシュみな人間不信の顔ばかり
はよ起きてすいた電車に乗った夢
カーラッシュ今日を生きて顔に
ラッシュラッシュ母の願は無事な顔
馬みたい立ってねているラッシュ時
昼食のラッシュへうどん啜る音
ラッシュに慣れ社風も慣れ胸を張る
ラッシュの中の年寄りは俺だけか
カーラッシュきんなん見つけた御堂筋
足踏んでおいてボヤイテとラッシュ
メーカーにはくそ笑まきカーラッシュ
盲判押しにラッシュをもまれて来
京の街らしゅうラッシュも京言葉
ラッシュアワーの何時もと遠き恋
モクモクと凡人ラッシュの列につき
ラッシュアワースリ職場へ乗り遅れ
ゴム長で女ラッシュへ早出する
あきらめた顔でラッシュに揺られ
朝のラッシュにすいている赤電話
言語同断なラッシュ政治に触れ
再会の二人をラッシュ押し流し
旅帰りのラッシュをはずす飯にする
会う人があってラッシュを耐え忍び
つり銭を握ったままで出るラッシュ
朝夕のラッシュも知らぬ職を持ち
乗車ラッシュ女ヒップを遠慮せず
ラッシュアワー床しいコロンと女と坐し

智子 漢介 生笑 天歩 静水 力客 一三夫 千万子 勝晴 恵朗 操柳 白柳 花梢 滋雀 柳志 生々庵 楨三 与呂志 鬼遊 弥生 小松園 春果 小松園 あいき 白柳 柳志 柳太 修史 桃路 阿茶

盃のラッシュ男の羽はたく日水客
ささやかな善意ラッシュの中に消え武助
ラッシュ無情いとし妻の手も引多志

兼題「虫」

清水白柳選

焼きあみの上へ這い出し栗の虫章雅
傘さしてやりたい虫よ雨が降る正朗
痛いから叩けば虫がころげ落ち日満
虫の音に晩酌追加たのみます清子
鈴虫をほめて借金いそびれ柳太
手を合わす虫もいたろう籠の中力
五十円の虫五十四円鳴いて死に二三
壺育ちの鈴虫放つ露の庭阿茶
物指尺も箒も油虫もあわて茶
かぶと虫並べて都会めしが食え柳志
お茶室のしめりへ昼の虫が鳴き萬
鳴くのかと聞いて夜店の虫を買生
たつぷりとスモッグ喫ったかぶと虫力
灯をしたう虫に気使う仕立物操子
ガス中蛭まきぞえを食うて死ぬ鬼遊
アベノ橋虫とはいえぬ金で売り柳太
鈴虫へ土産忘れぬ市場籠恵二朗
笑顔になつて医者も暫く虫を聞き水客
虫の声するで子守り立ちどまり天笑
絶ち切れぬ未練うるさい虫の声花梢
虫籠で短い命なお縮み文秋
こんな筈でなかった標本のくつわ虫生々庵
虫しぐれまててババのクラクション阿茶
休暇村淋れてはとと虫の恋富久一
縋きて紙魚の眠りを醒しけりどんたく
背信の記憶を責めるくもが降りあや子

犬小屋で見つけられずに虫がなき萬的
虫二つ動かずもとの虫しぐれ言也
虫にいて敗北感に独りいる眉水
虫の音に聞き惚れていて人嫌い天笑
コオロギのあせりブロックに突き当生
虫かごに入れて命を考えず白柳
低音の虫をさがして耳すます

兼題「宿命」

北川春果選

五十年の不作も宿命とさとり切り干梢
宿命とせせら笑っている若さ旅子
宿命にしては奥さんよう代わり礎山
宿命をさとる家業を嗣ぐとす好水
秀才に生まれ因果の棒を振り扇郎
宿命を素直に背負い蛙の子幸代
宿命か私も他の子を育て季賛
宿命にかかわりのない職に生き虎城
一挙手一投足噂にされるのも宿命
宿命にかこつけておくる苦勞性
宿命とさとりどうにか生きんとす操子
細織る音に育つて島に生き水客
宿命の中で小さな夢を持ち文秋
宿命とあきらめきれず来た家裁弥生
宿命の重荷父が偉すぎる花梢
もの心つけば宿命待つ人生与呂志
宿命に勝つて日陰の身に生じ葛城
生涯を亀は甲羅の中に生きた井堂
父子二代敷かれつ放しと言う宿命一三夫
宿命のライバルなどどへボ将棋天笑
宿命をはねかえしそう子の瞳大吉
有為転変みな宿命に罪を被せ

法灯を継ぐ宿命の髪を剃り桃路
庖丁をとく身進学をあきらめる静馬
ドヤ街の宿命論者へ陽が温い久志狼
宿命を背に感ずる歳となり鮫虎狼
宿命の嫉妬に女取り乱し大吉
さまたまな宿命が着た貸衣裳河産
宿命は肩書が待つ御曹子いさむ
酔えばまた宿命論となる不惑三
その軌道はずせば灰となるさだめあや子
お百度を踏み宿命に逆らわず小松園
悪あがきでも神様には勝つ富久一
台風へ日本人を意識す貞山
宿命の子をかすがいに撫り戻す
宿命は悲し子供は産めないの静水
人間の宿命飯面をつけている夢成
宿命を交える三つの名前もち花梢
宿命の女をドラマいじめすぎ形水
宿命かピーク求めて山男春果
慰謝料の額も宿命かと思

月日 十二月七日(日) 午後一時開演
場所 大阪市東成区民ホール
第二回 (区役所三階)

奇術発表会

(入場無料)

特別出演 “大魔術” ゼンジー中村
賛助出演 “腹話術” 英 まさみ

主催 関西奇術教室



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

第12回近県川柳大会 (竹原市) 静水報

兼題「箸」 吳 三浦 宏選

今朝からは五分粥になる箸の向き 伯峯
素うどの箸がかぞえている賛否 里風
箸添えて独身寮の子に会えず 茂美
軸新聞にくぎづけ宙に浮いた箸

兼題「マツチ」 下関 中村九呂平選
マツチするマダムの憎いタイミン グ 峰 堂
マツチ擦る手付と秘めた過去を持ち 天石庵
共稼ぎマツチが悪い子に育て 洋児
軸 マツチする仕草もサービス料のうち

兼題「窓」 大阪 橘高薫風選

二人の秘密を守る窓を開け 湖水
窓閉めただけで未練は断ち切れ 扇水
飾り窓女の自由売って いず 孤堂
軸 窓があつたロメオとジュリエット以来

兼題「盃」 倉敷 田中好啓良選

乾盃をさせられている捕虜である 鼓草
大賜盃男の涙じつと見る 聖孟
盃の中に男の海が見え 薫風
軸 停年の日の盃に酔えず 居る

兼題「知恵」 今治 月原宵明選

手抜きする知恵は棟梁 教えない 枯泉
いい知恵に叩かれたのは膝坊主 彩峰
鏡から母おどろかす知恵がわき 好啓良
軸 牛の知恵後すざりする屠所 道

兼題「鍵」 奈良 伊藤勢火選

今日からは妻という手で鍵をかけ 秋子
共稼ぎ生まれるまでの鍵を 久米雄
参観日先に去ぬ子へ鍵をやり 三寿枝
軸 女一人城守る 鍵鈴が鳴り

兼題「短気」 福山 斉藤正一選

お化粧の下でやり場ない短気 清太郎
気疲れの短気と妻は取り合わず 好郎
純情なだけに短気を笑うまい 一高
軸 逸話にもならぬ短気で年を取り

兼題「海」 広島 石原伯峯選

渚今宵は私だけのもの 葉子
荒れる日も風ぐ日も海の偽らず 剣人
海かなし海に定まる色がなし 不朽
軸 流れ寄る椰子の実もなき海昏れる

兼題「血」 大阪 菊池小松園選

朱ひとつ入れた色紙に 血が通い 天笑
父の血のいまま国旗のしわのぼす 好啓良
三面に血の匂いなき日を願う 潮音
軸 席題「フアイト」 竹原 山内静水選

二役のバイトの朝へ湧くフアイト 康宏

母さんのフアイト今朝も五時起床 白竜
体面をかなぐり捨てた日のフアイト 伯峯
軸 フアイトをむき出し詫げる事多し

城内吾柳氏送別 米子川大柳会
欠陥車モーターまでを引きずられ 布堂

モーターが出来るうわさの草を刈る 青湖
モーター兼業店主そこで鎌をふり 通児
モーターの此処でも噂さ三億円 月歩
片意地か違反と知った横車 節枝
最敬礼したから許すという違反 新雪
挑戦の孫へ挑れている平和 孤呂
茶柱が立つ挑戦の朝和む 弘朗
ささやかな挑戦女房の言わす 祥月
ゲバ棒に挑戦する機動隊の秘策 三鉦
特大のシャツ着て思想など持たず 勉
特大と言われ私は和服すき 近志
特大のバンティ小さく干してあり 進路
特大と云いそびれてる下着市 多可志
洗濯をしたら特大ヒップ揺ぎなし 竹馬
我が家の平和特大ヒップ揺ぎなし 成子
特大の地声マイクもこれれそう 吾柳
メロディーがほぐして呉きと見合い 翠生
メロディーのように進まぬ恋に泣き 一机
メロディーを流し空をコマシヤル 茂人
県外へ出て故郷の過疎を言い 茂人
県外へ視察して来た珍参り 泉甫
県外のナンバ一つけた墓参り 左撫朗
県外へ就職親もあきらめる 明朗
起きるまで客のひる寝ははつとかれ 明朗
孫二人昼寝は遠いものになり 明朗
入学待機今日ゴロゴロする昼寝 明朗
嫁ぐ日へ寝溜めのような娘の昼寝 明朗
昼下り金魚ものびている昼寝 明朗
慢性を断ち切るメスへ踏み切れず 明朗
長びいた上に余病も背負いこみ 明朗

二年もつづいた注射今日も射ち
持病苦におぼつかなくも家業継ぐ
小銭など貯めて老後を信じきり
子の日記母に小銭の貸しがあり
大金を貯める人だと小銭知り
合服の中で小銭が夏を越し
ポケットの小銭煙草の粉なにむせ
ちと小銭ためた余裕の蠅たたき
へんくつの名でちやっかりと小銭
月末のたばこへ小銭かきあつめ
賽銭に財布の小銭かき廻し
振り返る方が器量の差を感じ
ふり返る心に悔のないゆとり
振り返るつづらな君の目がまぶし
子を伴れた初恋の人振り返る
再婚の話題へ過去を振り返り
南大阪川柳会 金井文秋報

どちらにも道理があつて手古ずらせ
ふしだらな娘に一家ささえられ
巡視船視界にソ連の灯が揺れる
冷や奴まだひえぬ間に夫帰り
けむりともささえになつて居つた父
板前が自慢の腕で冷奴
勝運が続いてからのマスコット
明治の道理昭和の子が笑う
こなごなにこわす子供の冷や奴
マスコット無事故を願う窓に揺れ
山頂の視界へ人間とりもどし
ママとパパにも見せないマスコット
昂奮も醒めて道理へ泣きくづれ
定時制三時間目は眠りそう
三歩 大鳥 緑之助 日満 一保 舎人 暢柳 草丘 花子 清流 雄々 舞吉 蛙眠子 瑞枝 無閑 柳梢 花枝 文秋 金井

天と地をさまよう如く居眠りぬ
誤解したままで視界を遠ざかり
水打つて宵宮になった冷や奴
失恋をしてマスコットに持つ不信
派手な店裏にささえの妻も居り
リーダーを信じて視界ゼロを飛ぶ
もう家の暮しささえる娘に育ち
もうちょっと居眠りしたい床屋を出
居眠りを意識している自己嫌悪
居眠りへ迷惑する横顔 鶴声
アポロ11眼下に見る世界地図
パパの居眠り下車駅を子に頼り
冥想のデスク居眠りしてるよう
居眠れぬ場所と思えば尚眠し
ものの道理判っているから危険
マスコット彼女の一風変つて
玉造川柳会(大阪市) 西出栄報

チリ一つない住宅に愛が欠け
子が出来る頃には家もいたみ出し
子が造る積木の家の広い庭
家建てた不覚湿地とは知らず
二階借りしてるが日本案じて居
文化財保護に宅地がひっかかり
大雨警報もう雨洩りを覚悟する
住宅を餌に虎の子かぬとられ
設計図ふんざりつまで赤い線
紅提灯情緒嬉しいビヤガーデン
ビヤガーデン気分出たころ灯を消
夕焼に揺るビヤガーデンの旗
ビヤガーデンで乾杯小っぱな悪魔
星はなくともビヤガーデンに詩綴る
照一 智子 形水 白柳 柳太 喜風 肖二 誓二 君九郎 凡九郎 鶴声 儀一 千代 葵一 葵水 雅水 章雅 富久一 眉水 鬼遊 肖二 肖一 古方 白柳 柳宏子 葵水 一栄 静馬 虎城 六童子 照一

暴力をおだてるような組もあり
暴力とごっちゃにされた愛の鞭
暴力の空しさ独りになった知る
静かなる暴力僕を喋らせず
暴力の危難救うて暮れる
腕力でへこますまでは妻に負け
チンピラが相手に不足ないと言
暴力へ従いてゆく日の眉を塗る
女子プロレス暴力に出る色気
暴力に女の知恵は逆わず
湯たんぽでやけど鈍さを冷やか
ボヤ消した安緒やけどが痛みだ
火遊びのむくいと相談欄きびし
やけどした子へ一生を託つづけ
大阪通信病院川柳会 森下愛論報

スモッグを忘れ帰省の青畳
スモッグは言わず栄転羨やまれ
台風がスモッグ一緒に持って行き
愛論 秋風郎 夏生 形水 頂留子 綾女 雀踊子 静歩 眞山 誓二 金三 凡九郎 恒明 竹青
黄銅六角ボルトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3452-114
夜間 06 4400 八

夏祭りテレビのために二度もやり
夏期休暇取って田舎の夏祭り
夏祭り人手不足でもめ通し
別染のゆかたで踊る夏まつり
おみこしも汗かきそんな夏祭り
草右

南海電鉄川柳会(大阪市) 辻圭水報

交通マヒの責めを市電は負うて消え
交通マヒスピード違反あがらない
交通マヒ時計見い遅刻する
交通マヒ道路の狭さよくわかり
交通マヒ順法運転気がねして
交通マヒ横目でスタコラ犬走る
交通マヒネオンつくまで続きそう
交通マヒボディーを叩く雨の音
運ちゃんもマヒへ地下鉄する気
金子三郎

どんぐり川柳会(羽曳野市) 川村好郎報

どん底へ友さりげなく置いて去に
退院のあてがはずれた蠅たたき
あてはずれ置いた土産がうらめしい
どん底に暮すも四季の花があり
あてにした子にババ抜き主張され
どん底の時日の夢に子を育て
どん底の明がよかつた夫婦仲
夕膳に太公望のあてはずれ
あてはずれくわえ煙草が眼にしみる
あてはずれそれで棄てないデカの汗
すまんあと先手を打たれ勘定もち
どん底の斗志ドラマの芯となり
質ぐさのあまりに安いあてはずれ
もう靴もリュックも揃えたのに雨か
受手形割引出来ぬあてはずれ
桂馬

晴夫 幸男 甘草 竹荘 草右 貴山 摩太郎 圭水 耕人 八郎 和郎 金子三郎 宏子 桂馬 よしを 猿女 一治 吐来 輝女 夢女 いさむ 友恵 河股 青木 醉々 白石 圭坊 九鬼

どん底をふと思ひ出しなつかしく
あてはずれあきらめつかず苦笑い
夕涼み古参の患者巾きかし
夕涼みけいたらいラジオ放つとかれ
団体の宿抜け出して夕涼み
誠実一路どん底にある誇り
好郎

どんぐり川柳会(大阪市) 川村好郎報

正確に時計が合うて急ぎ足
口実がまとまらぬまま急ぎ足
貰うまでいそぐ延着証明書
共稼ぎ妻に負けない急ぎ足
母来てるはずのわが家へ急ぎ足
急ぎ足誰かが尾けてる夜の波止場
皆勤が飛ぶ一分へ急ぎ足
頑くなに對話忘れた急ぎ足
酔いどれを避ける女の急ぎ足
急ぎ足もう友情もこれまでか
言いくい返事は妻にさせておく
一言の返事聞きたく尾灯追う
何思ひ出したかケチが急ぎ足
アリの列いつ眺めても急ぎ足
急ぎ足保育所の子へ乳が張り
急ぎ足過ぎてモード見落さず
里帰りすんで子連れの急ぎ足
台風を知ってか蟻も急ぎ足
見送りの義理だけ果す急ぎ足
間に合わぬのにと急ぎ足
此の頃のくらしが返事にぶらせる
まるべに川柳会(大阪市) 川村好郎報
クラーはないが水撒く庭がある
子に賭けるその強さだけ子は反き
元房 春風 箕陽 豆行 いわを 好郎 保郎 敏雄 喜風 虎声 痴亭 幽玄 八郎 生良 史好 比呂路 功雄 鬼遊 儀一 真砂 弥生 草春 好郎 白柳 小松園 立兒 節子

南大阪川柳会

十一月二十日(木) 午後六時

友情・エラー・特別・腰
松崎町二丁目 以和貴荘

玉造川柳会

十一月十日(月) 午後六時

得意・慢性・特別宿題・沖繩
玉造交差点南百米・大阪信用金庫

あわててる恰好五十の坂が見え
人生の賭けよとさつと嫁つちまい
ゆるすことに決めて心の平和と返り
浴衣がけ背のびしてみる大文字
席順をあわてて変える客が来る
川柳大阪(大阪市) 児島与呂志報
日曜日三流大工あいつとめ
銀行の屑籠紙幣が交りそう
折角の休暇を妻と居て無口
とまり木に憂国の士のつばがとび
枝豆のビールのアワヘ目を細め
健康が腹八分目承知せず
爆発をしそうに減らす酒の量
不快指数柔らぐような駅の花
良材がゲバ棒となり山は泣き
漁り火のようなネオンの午前二時
入院をしてから調子が悪くなり
雨が降るから飯場へ早く引上げる
雨降りのテルテル坊主にくまれる
ゆずり合う姑は平和妻上位
声紋の朕一億へやさし過ぎ
泉睦 幸子 瓢太 信代 好郎 一の字 凡々 継々助 本蔭棒 三十四 洛醉 鉄舟 喜醉 秀峰 孤舟 茶々坊 漁人 正則

独身寮器用につけるMボタン 笑風
大阪の情が冷たい他国もの 六童子
いくつもいくつも嘘ためている女 与呂志

水粉千翁報

わが首を締めるラッパと知らず吹き 柳子
やんわりと白紙に戻す語がきれい 白水
現なまに替えて日照りが苦にならず 三林坊
出張へ妻やんわりと釘をさし 修二
如才なく首をすくめてから儲け 千翁
その端を妻が持つてる首の綱 慶子
ごもつともですと無心へ首をふり 鼓草
ハイミスの自信おみくじ引き直し 里風
このバジ付けるのと横に振れぬ首 秀二
少年の草苗空へつづく歌 朝魁
児がいまず顔で歌っている平和 扇水
ハイミスの何か主義ある事務机 郁恵
本人にすれば間違いでない家出 流鶴
耐えている少年工へ今日も照る 林風
お気に召す迄首振って扇風機 秀子
やんわりと核心をつく京言葉 寛枝
運命のいたずら間違ひから誕生 安静
長男のさだめに耐えた肩のこぶ 澄子
風鈴へ今日の日照りを預けよう 八笑人
ハイミスの机真つ赤な花があり 好郎
首横に振れどひと押し待つ女 祥月報
川柳まつえ

背伸びしてのぞく殿下の乗用車 雪美
強行と見せかけ裏の裏をかき 軒太楼
手さぐりてよけ打った向う脛 白吉
強行をした反動を打とおそれ 舞汀
冷房のない役人の無愛想 孤呂二

冷房を出て三倍の汗をかき
手さぐりの手へ一匹の蚊がとまり
はらはらさせて左前たちなおり
本日の暑さへ冷房の肌覚める
株下落老舗とうとう左前
富柳会(富田林市) 阿部柳太報

学校でブルーパントのままも居り 紅次
曲角ちがうとほえむこの女 孝
電柱も細る思いの曲り角 ヒデ
来るものは来たと引退する気なり 摩太郎
七十年民主政治の曲り角 凡吉
決心がついた別居の曲り角 花梢
目札が握手に変わる曲り角 八郎
曲り角折れておんなに 笑痴
二代目の得意もやはり値切るくせ 白柳
上得意でしたと手形ながめてる 柳太

備前川柳社

目賀芳月報

美しく蝶になる日待つ毛虫 万女
木の下でデート毛虫に気がつかず 久米雄
砂ばかり立てて外車に追い抜かれ 秋月
洗濯機砂がたまつて目が育ち 清月
チッポケな砂一粒が眼に入り 芳春
国会のテレビは砂を噛む思い 正州
砂浜に好きと書いては消すも恋 浄美
片思い浜の地砂へ何か書き 伊久野
一握の砂に仙人掌根をおろし 胡風
砂おろしなどどこにやうか言 一声
仔猫さえ後の始末は砂をかけ 三与子
叱つても叱つても砂へ来て遊び 柳子
青葉かげ昼寝へ毛虫たれ下り 飴坊
ウイロー社句会(ハワイ)

旅行・宴会・リクリエーションの
ことならどんなことでもご相談くだ
さい。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田4-40-5

TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通2-18

三洋電機(株)本社食堂内

TEL 06 (991) 1181 内線 588

それだけ言ってお医者様は座をはずし
惜しみなく女は医者へ脱いで見せ
健康法も知らずやって医者通い
代診は冗談も言い安堵さす
少うしは飲んででも言う医者にかえ
癌研の医者癌病で昇天し
幸せは寺より医者の世話になり
手遅れになるまで迷って医者に行き
身投げするところには惜しい松とい
なげやうな暮しに不安つきまとい
満塁へ投げる投手の手がふるえ
金婚式茶碗を投げた顔でなし
浮草

老いの身もついさそわき投げキッス
三振に敵を封じた肩の巾 紅茶女
ふり袖の娘どうしが投げキッス 義女
買える程払って投げてまだとれず 紅溪
和歌山短詩型文学クラブ 垂井葵水報

安月給貯めた分またあがり 盛太郎
しんみりと妻の質素の皺を見る 公作
始末した食費は妻の衣裳代 昭伸
サラリーマン月半ばよりしまつる 松子
流行が悪いの質素がいつも敗け 春子
質素なるものほど涼し衣食住 ひろし
好きな物やめてしまつがのど鳴らし 繁治
食堂のメニュー安いのからさがし 泰彦
パパと来て喰べるメニューを見て婦人 葵水
質素ではない便箋一枚で足りる 不二也
かまぼこの板も大事に寡婦ぐらし 太茂津
そここの空地はカーの憩い場所 三幸
亡き人の名そのままの空地なり 智恵女
土地捨てしわれに父の夢母の夢 光治
土地値段聞いてビックリ土地を変え 哲夫
佳き人を知り永住の土地となる 政夫
子と別居土地に執着捨て切れず 京子
土地低く大雨のたび夜を明かす 五月
土地売買噂話を聞くばかり 宣子
足音を聞いておつゆの鍋をかけ 蘇子
下駄はいた足音高し盆踊 風子
足音で今日の商い解る妻 勇次
パチンコの答えは戻る足音で 城石
あの足音天女の如き医師ならむ 一洗
足音を消して秘密の影がある 守夫
足音に心読まれる資金繰り 富子

時が流れる足音がきこえない 次章
こまつ柳 山上千太郎報

月面の砂まき上げて 第一步 城南
砂に立つだけの水着を選び好み きみ子
閑趾吹く風だけでよしアバラ骨 弘美
土砂くずれ一息早くて記事にされ 富美子
飲む会へまことしやかな規約なり 芳朗
カーテンが揺れる成程こんな風 久子
滝つぼが近い谷川伝う風 魚山
波ひくく高く遺族の花がゆれ 清子
女子寮にバンティ一つひるがえり 柳子
砂浜の若さおへそも披露する 信子
秋立つと風に一すじ冷っこい 千太郎
駒つなぎ 岸南柳報
今島を難れる船に蝶まとう 育園
休養のための釣だとビクは空ろ 弥栄子
女房病みおかずの舟も買うてくる 規一朗
船渡り臭い堂島世の流れ 柳信
尾籠ひろげ車内で獲物のひとくさり 市子
停滯の余波がフェリーまでつづき 小路
笹舟へおさげの過去がゆれて居り 小みよ
舟酔いに他人の世話が身にしみて 南柳
舟酔をさませて浜の石拾う 多津緒
埋立地漁船は浜に朽ちたまま 白柳
ふじかけ短詩聴会 藤本礎山報
月曜日居留守使って居ても去に 良枝
月曜の晴れが昨日に欲しかった 朱実
休暇なき兄は月曜口にせず 昌代
月曜に代休とった運動会 美弥
月曜も二時間昼寝の夏休み 千代子
月曜日疲れ果ててるお人好し 国子

第23回 市民川柳の会

日時 十一月二十三日・午後一時
会場 堺市熊野町西一丁
堺労働セツツルメント

(阪堺綿大小路下車西へ一丁北へ
半町)

挨拶 堺市文連協会長 高木幸太郎氏
兼題 人 気 竹山逸郎選

昨日 中尾藻介選
小 声 吉岡青香選
言 訳 西村左久良選
謎 八木摩太郎選

席題 四題(各題三句)

当日 題並に選者発表

会費 二〇〇円(作品集代)

投句の方は前日迄に堺市九間町東
二丁九八木摩太郎へ金百円(郵券
代用可)相添え申込む事

主催 堺市文化団体連絡協議会
後援 堺市・堺市教育委員会

先生のネックが見える月曜日恵子
母の指図ここまで届かぬ月曜日万
月曜の牛乳土曜にもう来とり秋宏
以上小中学生
月曜日子等楽しみの草野球貴恵
孫の手をひけば月曜また楽し
月曜日課長もやたらあくびをし透
理髪屋へ来月から月曜思いだし
月曜日日曜疲れを跳って起き鎮也
月曜日日曜避けた老い二人勝久
月曜も日曜もなく鉄を振り征山
夫病めば日曜月曜意識せず佳女
日曜も月曜もなき妻の汗磯山
城北明朗会
ご近所の一等亭主に迷惑し弘生

定年の主人白髪を抜きもせず
禮那さんのエプロンもある新家庭
汚職など出来ぬ主人と添いとける
飛鳥道昔をしのぶ蓮華草
人手不足にタダの仕事ばかりして
八百八橋浪花も変る歩道橋
大阪の交通地下へ背負込み
川柳まばたき
出原敬一
胎動のよろこび私は母となる
胎動が男の子だとつげて
胎動におののく日あり秘めし過去
胎動の児が母を責め父を呼び
同情が変なうわさの元になり
長病めば同情すなおに受けられる
寄せられる情にもろい齢になり
この平和分けてあげたいベトナムに
一乃字
秀村
隼人
聖川
進幸
多幸
三十四
敬望
三重子
松月
文子
夢春
宗佳

ただでない同情寡婦は恐く受け
同様の深さを計る社会鍋慶治
★柳界短信★
▼三井酔夢さん(香川県同人)のご子息が岡
大病院眼科に入院されているが、眼病のこわ
さをしみにみと痛感されている。
▼福島鉄児氏(門真市同人)は九月二十一日
急に意識不明になり救急車で入院。十一時間
ぶりに意識がもどり、現在はよくなられたが
糖分欠乏だったとのこと。
▼森田布堂氏(鳥取県同人)から柳信。川柳
塔赤碕支部と赤碕番傘と共催で12月7日赤碕
駅前中村旅館で早村夕路古稀祝賀句会開催。
▼王紫さん(出雲市)から菓子さんはミス川
柳塔の形容にびったりのご麗姿でしたと。
▼加藤貞山氏は編集部へ陣中見舞にご来駕。

川柳塔社同人総参加!

一人一句(60字以内の小文をぜひ書いてください)

新年号を飾る

ユーモア特集!

用紙は原稿用紙
十一月二十五日着便

いま川柳で忘れられているものはユーモアである。雑詠や句会で発表したユーモアにあふれる句をどなたも一句や二句は持っている。そこで同人全員がそのうちの上品でユーモアに富む一句を新年号に発表していただきたいのです。
いままでの新年号をもう一度ご覧がって、書式をお守りください。原稿は編集上二十五日着便で締切ります。

水性超細字用

ライオンペン F-50

ライオンペン F-50

黒・青・赤の3色
1本 ¥50

福井商事株式会社

中島生々庵著
「川柳講座」
送料共 50円

★
若本多久志著
「親ごころ・子心」
送料共 265円

★
八木摩太郎著
「古川柳に
詠まれた
堺の人々」
送料共 75円
(堺市南清水町32
新谷笑痴)

年賀広告受付

本誌五分の一段が千円です。
グループをおもちの方も利
用ください。

★原稿締切・十一月末日
あなたもぜひ一口

この寸法が二百円
川柳塔社

振替口座大阪
三三三六八番

新年号発表(11月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵 選
近作柳樽(10句) 菊沢小松園 選
課題吟(各題5句以内)

募集
「かるた」 池田あや子 選
「暖房」 西垣錦風 選
「警察犬」 田垣方大 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字
は楷書で新かなづかいにしてください。

二月号発表(12月15日締切)

川柳塔(10句) 中島生々庵 選
近作柳樽(10句) 菊沢小松園 選
課題吟(各題5句以内)

「独身」 村上春巳 選
「梅」 中島小石 選
「タレント」 長野文庫 選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

本社十一月句会

日時 十一月七日(金) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)
阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

兼題
柳話
「ハブニング」
「替え歌」
「食通」
「裏づけ」
席題
三題(題と選者は当日発表) 各題三句
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

清水白柳 橋高薫 傍島静馬 本多柳志郎
川村好郎 選選選選選選

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社

12月の兼題 「話銀」 「術行」 「スパイ」 「逃げ場」

定価 四百四十円(送料六円)

半年分 八百七十円(送料共
一年分 千六百八十円(送料負担)

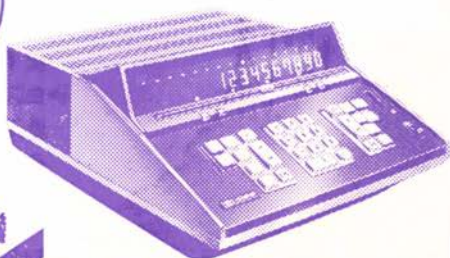
昭和四十四年十月二十五日印刷
昭和四十四年十一月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
編集兼 発行人 中島蓬太郎
印刷所 大陽印刷株式会社
郵便番号 五四二
発行所 川柳塔社

電話 大阪・二七一・三九八五番
振替口座 大阪・三三三六八番



タッチでえらべば
やっぱりサコム

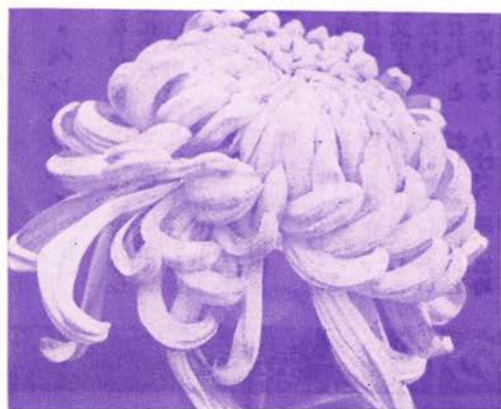


サンヨー電子式計算機

サコム
SACOM

見やすい設計 ICC-162型 280,000円
平面表示ゼロサプレス・%キー付き
16けた2メモリー高級品

SANYO 三洋電機株式会社



一番よい酒

うまい酒

清
酒

菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影

黒潮おどる

紀州路へ



▶白浜・新宮ゆき◀<なんば発時刻>

急行きのくに2号…(毎日)……7時45分発

急行きのくに6号…(毎日)……12時51分発

急行きのくに10号…(毎日)……16時40分発

夜行直通列車…(毎日)……22時15分発

▶白浜ゆき◀<なんば発時刻>

急行きのくに52号…(土曜)……13時13分発

●きのくに6号は座席指定席券を 他の列車は普通券をなんば駅でそれぞれ1週間前から発売します

お問い合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5038

南海電車

★菊かおる―芸術の秋―文化の月にふさわしい字句がならんでいるが、いつになつたらそれを満喫できるのか―心細いかぎりである。

★改題いらい五十号を迎えたが、原稿用紙の文字を活字にしただけで、何を残したか、ということになる

★と、五十冊本を積みあげただけにすぎない。まことに申しわけない。

★そろそろバトン有能の新人にわたしたいと思うことしきりである。

★三十代の若手に思いついた仕事をしつてはどうか。

★話をゆるめよう―毎号発送日には、葉子さんが、好郎、白柳、薫風

・ペンペン草・

の三氏に電話をして手伝ひに来ていただく―この日は葉子さんがキャップで、ボクら男性軍は彼女の指揮下にはいる。

「好郎先生は雑誌を封筒へ入れて、白柳先生はホッチキスをお願いしますわ―でな具合いだ。この三氏のおかげで、四、五時間早く皆さんのお手元へ本が届くわけである。こうしたことが五十号もつづいてきているのである。

★年中行事となつた、「はたらくた」の特集も第五回をかぞえた。いつか出版したいと思つてゐる。

★毎年のことながら年賀広告よろしくお願いします。(不二田一三夫)

純良医薬

㊦ 第一製薬

うちみ・肩こりに

べタンと貼るだけ!

<新型パップ剤>

パテックス



140mm×100mm Ⅱ3枚入